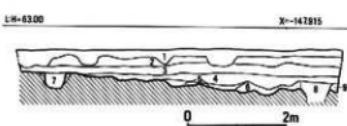
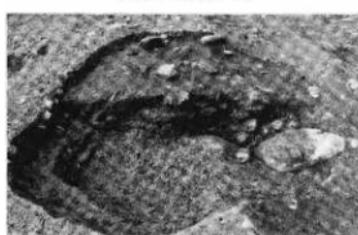


造構平面図 (1/100)



西壁土層断面図 (1/100)



に混じって若干量ながら17~18世紀の陶磁器片が出土した。このうち、発掘区の南端で検出したP 3は土層断面の観察から、上層より掘り込まれていた。P 1~3とも全般的に埋土が軟弱で、礎石根固め石はほとんど残存しない。

なお、発掘区北半部分を中心に、柱穴もしくは礎石据え付け穴の痕跡と思われる造構を数箇所で検出したが、発掘区外へと延びる可能性が高く、今回の調査成果のみで明確に建物跡として想定することはできない。(武田和哉)

### III 出土遺物

遺物は全部で遺物整理箱22箱分が出土し、このうち20箱分を瓦類が占める。残りの2箱の大半は土器類で、そのうちの大部分が中・近世期の土器である。瓦類の大半は丸・平瓦であるが、軒丸瓦2点、軒平瓦6点、埠2点、熨斗瓦18点ある。以下軒瓦について記す。軒丸瓦の内訳は、6138 C a 1点、平安時代以降1点である。軒平瓦の内訳は、6712 A 4点、6717 A 1点、平安時代以降1点である。なお、軒平瓦6717 Aの瓦当面には、記号「3」が押捺されている。(山前智敬)

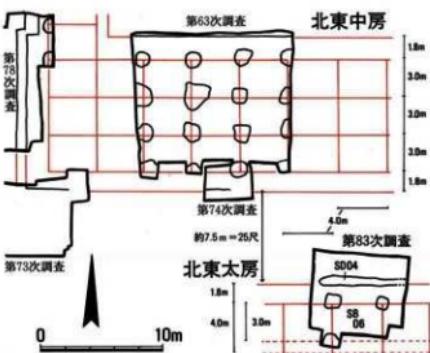
### IVまとめ

今回の調査では、北東太房の基壇やそれに付属する基壇化粧石、および基壇の版築や礎石等は確認できなかった。ただし、北東太房の基壇の北端位置と想定される発掘区内のS D04を境にして、そこから南側部分は北側部分より0.2~0.3m程度地山が高くなっている。過去の調査で確認した北西太房の位置などを参考にして、当発掘区内における北東太房の位置を想定すると、太房基壇北端がS D04付近に、また太房北側柱列がS B06の北側のP 1~2の柱列付近に、各々該当する。従って、S D04以南の地山の高まりは、地山を削り出す方法で造成された太房基壇の残存部分であり、S B06のP 1~3は太房建物の礎石据え付け穴の痕跡であった可能性がある。

しかし一方では、S B06のP 1~3の埋土に17~18世紀の陶磁器片が含まれる点や、S B06のP 1とP 3の柱間が3.0m程度と、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の記述や、過去の隣接する北西太房地区での確認値に比べて短く、北東中房とほぼ同じである点などについては疑問が残る。

依って、こうした現象から導き出される推察としては、ひとつにはS B06のP 1~3は太房の礎石据え付け穴痕跡ではあるが、近世期に礎石を抜き取りなどの為に、当該期の遺物が混入したとも考えられる。さらにS B06のP 1・2とP 1・3間の距離が異なる問題については、文献史料や過去の調査結果等を考慮するならば、南側のP 3が北側のP 1~2とは全く別個の造構である可能性も完全に否定できない。仮に同一の建物を構成する造構であったとしても、創建当初の造構ではない可能性が高いと思われる。あるいは大安寺の三面僧房が焼失する10世紀以降の時期に再建された造構で、その後近世期に到って礎石の抜き取りを受けた後の痕跡とも推測される。

今回の調査結果に依拠する限りでは、以上の推察が考えられるが、明確な根拠には乏しく、当然今後の北東太房地区における調査の蓄積を待って、再度検討してゆく必要がある。(武田和哉)

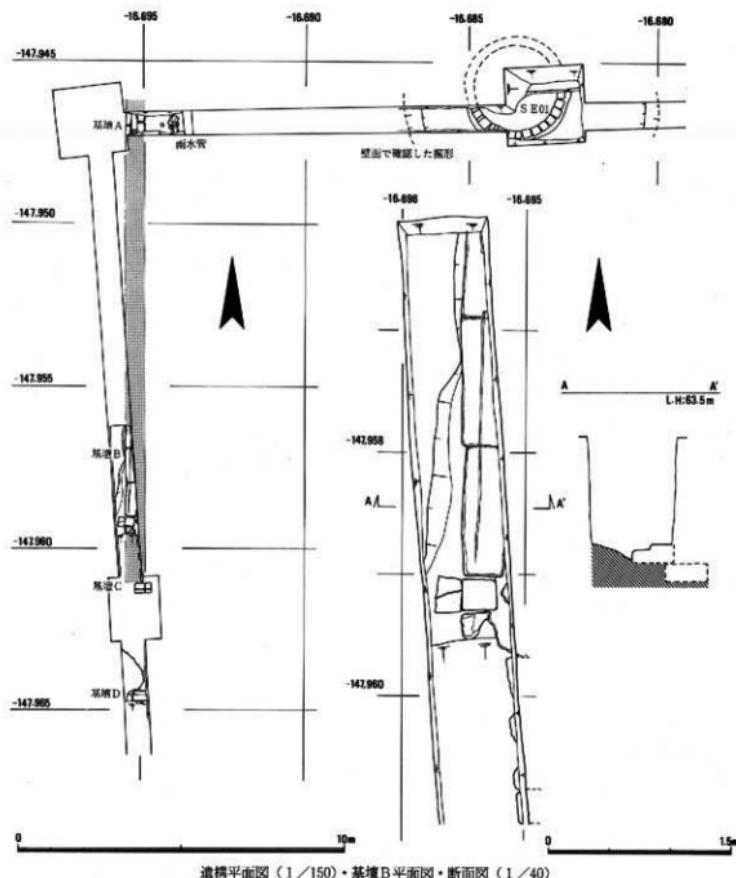


1) 奈良県の北東太房地区における75~1次調査については、「II 発掘調査の結果」『大安寺 50周年記念調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 1978を参照。

2) 過去の調査については、「史跡大安寺跡地の調査(2)北東中房の調査」第63次「奈良市埋蔵文化財調査報告書平成3年度」奈良市教委 1994、「史跡大安寺跡地内の調査 北西太房地区的調査 第65次」「奈良市埋蔵文化財調査報告書平成3年度」奈良市教委 1992等を参照。なお、平成9年度実施の第7次調査は後年度報告予定。

## (7) 賤院推定地の調査 試掘98-1次

**調査の目的** 本調査は公共下水道築造工事に伴う調査で、調査地は賤院地区にあたる。工事は総延長約285.3mの下水管埋設工事で、推進工法と開削工法の部分がある。推進工法部分では人孔部分を、開削工法部分ではその全域について、工事と並行して厳重立会調査を行った。調査の進行とともに、凝灰岩基壇や埠積井戸など当初想定出来なかった遺構が発見された。遺構の重要性から、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良市下水道建設課と協議の結果、これら遺構については発掘調査を行い記録作成とともに、工法を変更して遺構を保存することとした。なお工事の性格上、発掘区は工事掘削範囲内にとどまっている。



### 検出遺構 建物基壇と円形埴積井戸についてのみ記す。

建物基壇は凝灰岩切石の壇上積み基壇で、4カ所で検出し北側から基壇A～Dとした。

基壇Aは最も残存状況が良好で、基壇の東辺部分の延石・地覆石・羽目石を検出した。基壇は延石底から羽目石上までの高さが約0.55mあり、東西2.5m分を検出し、発掘区外西側に続く。基壇は地山を削り出して築き、基壇化粧石の裏込めの他、盛土は確認出来なかった。基壇上面の地山のレベルは約62.5mで、約10m東の井戸周辺の地山のレベルとほぼ等しい。基壇上面では礎石据付穴は検出出来なかった。延石は厚さ約10cm、地覆石は幅約33cm、厚さ約15cm、羽目石は幅約36cm、厚さ約15cmある。地覆石の角と羽目石外面は風化のため一部欠損する。また基壇の東0.8mの所には凝灰岩が散乱するが、調査範囲が小さく据え置かれたものかは不明である。これら基壇を埋めた灰色砂礫・暗灰色粘砂層からは9世紀末から10世紀初めの土器が出土した。

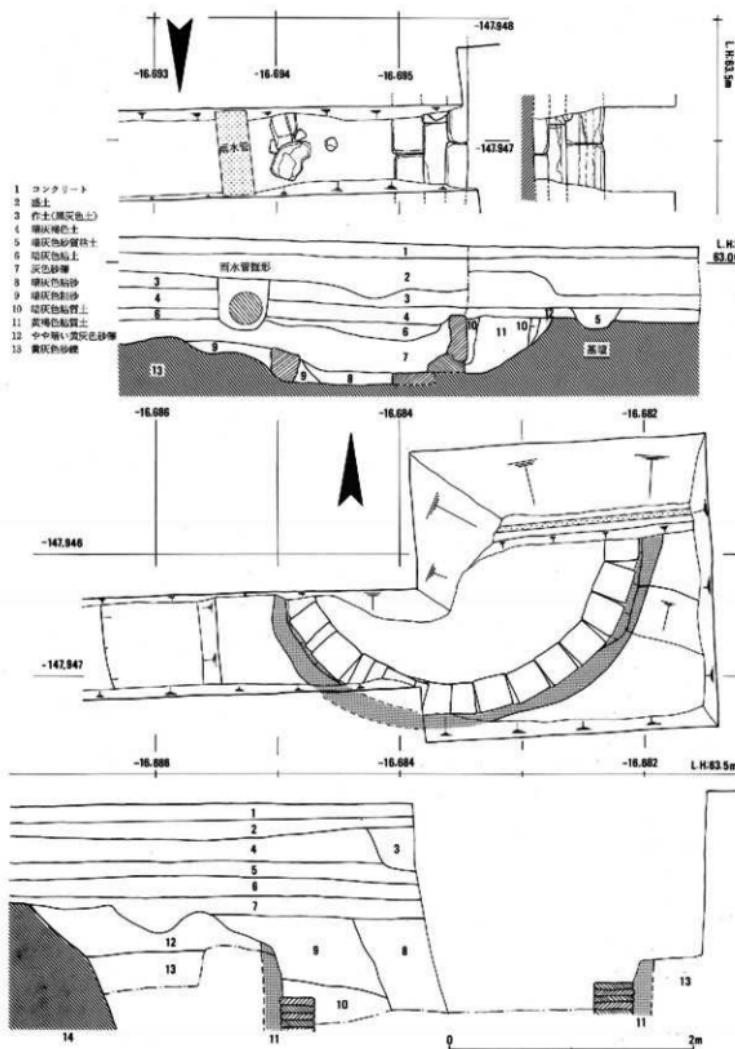
基壇Bでは基壇東辺部分を南北方向に長さ約5m分検出し、延石・地覆石を検出した。3石確認した延石のうち北側の2石は南北方向に並べられているが、一番南側のものは小口部分を西側に向けており、東西方向に据えられていることも考えられる。真中の1石は長さ約108cm、厚さ約13cmあり、南側のものは幅約28cmある。地覆石は南北に4石ならんで確認しているが、詳細がわかるものは真中の2石のみで、北側が長さ約105cm、南側が長さ約106cm、幅約33cmある。いずれも羽目石をはめ込むための幅約14cm、深さ約5cmの段をついている。1番北側の地覆石はこの段が長さ約45cm分欠けているが、ここが東石の部分かどうかは不明である。北から3石目と4石目の石の間には幅約30cmの隙間が開いており、その間に埠が2枚東西に並べて敷かれている。埠はその上面のレベルを延石の上面とあわせている。なおこの埠と一部重なる延石は、その部分を埠にあわせ削って凹ませている。地覆石の西側は基壇裏込め以外は地山である。

基壇Cでは東西方向の地覆石を1石検出した。この部分では工事掘削中に凝灰岩が出土したため、発掘区東側断面を精査したところ、東西方向の凝灰岩基壇が確認された。このため出土状況は不明な点が多く、断面図と出土した凝灰岩などからその原位置を復原した。出土した地覆石は幅約33cm、厚さ約15cmあり、東側の小口面が生きており長さは約52cmある。南側に羽目石をはめ込むための幅約13cm、深さ約4cmの段がある。なお西側断面には凝灰岩がない。

基壇Dでは東西方向の延石・地覆石を約0.5m検出した。延石は幅約31cm、厚さ約16cm、地覆石は幅約33cm、厚さ約15cmある。地覆石は東側の小口面が生きており長さ約52cmある。北側に羽目石をはめ込むための幅約13cm、深さ約4cmの段がある。なお西側断面には凝灰岩がない。

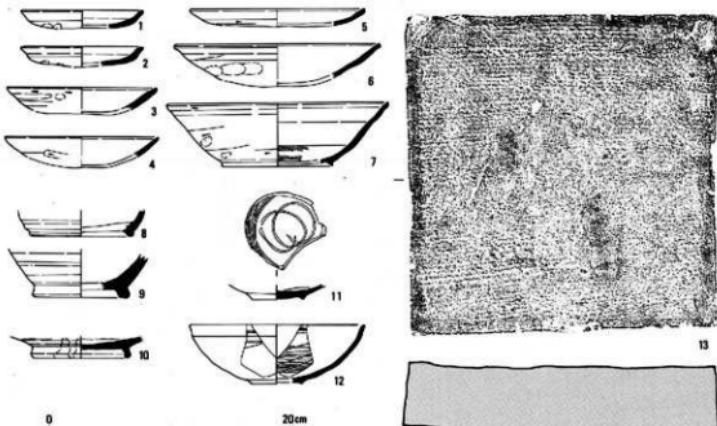
まとめると、基壇AとBは一直線上に並び同一の基壇と考えられ、南北約14m以上の基壇東辺が復元出来る。基壇は地山を削り出して築き、建物部分は発掘区西側にある。また基壇C・Dは東西方向の基壇の南北辺と考えられ、発掘区東側に続き西側にはなく、基壇A・Bの東辺に取り付くものと推定される。この基壇C・Dの幅は地覆石の基壇外側の辺で測ると約3.6mとなる。

円形埴積井戸SE01は内法径約2.6mの平面円形で、一辺約27cm、厚さ約5cmの埠を積み井戸枠としている。円周から推定すると1段30枚の埠を使用している。調査の都合上井戸枠内を完掘しなかったが、埠積を最高7段分約35cm分確認した。井戸枠は上から約0.7m分が抜き取られており、抜き取り跡から12世紀末の瓦器碗が出土した。なお1mのピンポールを差し込んで調べたところ、井戸の深さはさらに1m以上あることがわかる。埠積の外側には黄灰色粘土が約15cmの幅で貼り付けられている。掘形は標高約62.4mの所から内側に傾斜をつけながら掘り込まれており、平面形は不明であるが東西約7.8mある。なお調査の都合上遺構検出はその下0.7mの所で行っており、平面図の掘形はやや小さくなっている。なお井戸の構築時期は不明である。（中島和彦）



- 1 コンクリート 5 作土(黒灰色土) 9 混灰白色土 13 黄灰色砂  
2 クラッシャー 6 塗灰白色土 10 塗灰白色土 14 灰色砂  
3 水道管縦形 7 灰色粘土 11 黄灰色粘土  
4 砂土 8 塗灰白色土 12 灰色砂砾土

基礎△平面図・立面図・土層断面図、井戸S E01平面図・断面図 (1/40)



出土遺物（1／4）

**出土遺物** 出土遺物には遺物整理箱1箱の土器と、遺物整理箱9箱の瓦塼類がある。

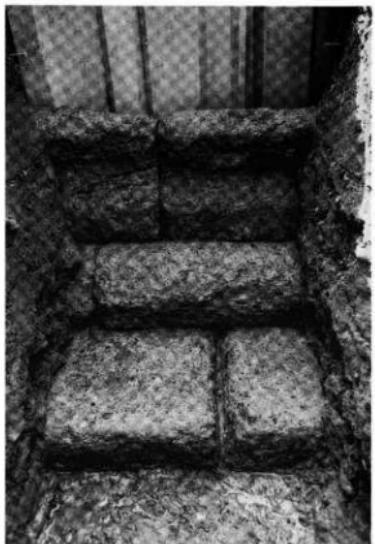
出土土器には古代と中世のものがある。1～7は土師器、8・9は須恵器、10は灰釉陶器で基壇4を埋めた灰色砂礫・暗灰色粘砂層から出土し、11・12は瓦器碗で井戸SE01から出土である。

瓦塼類には軒丸瓦2点、軒平瓦3点、熨斗瓦2、埠11点があり、他は丸瓦・平瓦である。軒丸瓦の内訳は6304D 1点、7251A 1点で、軒平瓦の内訳は6664 I 1点、6716D 1点、6717A 1点である。井戸SE01の井戸枠抜取痕跡から6304Dが、基壇4を灰色砂礫・暗灰色粘砂層からは6716D、6717Aが出土しており、他の軒瓦はすべて遺物包含層から出土した。井戸SE01からはその井戸枠に利用した埠が5点完形で出土している。これら5点は井戸枠部材を取り上げたもの1点と、井戸枠抜き取り痕跡から出土した4点からなる。13は井戸SE01の井戸枠抜き取り痕跡出土の埠で、1辺約26.5cm、厚さ約5cmの方形である。表面には縄タタキ目が残り、端部を幅約0.5cm分ヘラ削りしている。裏面は丁寧なナデ調整をし、側面はケズリ調整をする。表面および裏面には離れ砂の砂粒がわずかに付着している。法量・調整技法は他の4点にも共通する。胎土は5点ともにやや粗く、焼成は5点のうち4点がやや軟質で、1点が硬質である。色調は5点のうち3点は表面が黒灰色、内面が灰白色で、他の2点の表面はそれぞれ灰白色、青灰色である。側面に離れ砂が付着している点から、少なくとも型を用いて作られたものであると考えられる。ただし型への粘土の詰め込み方法は不明である。

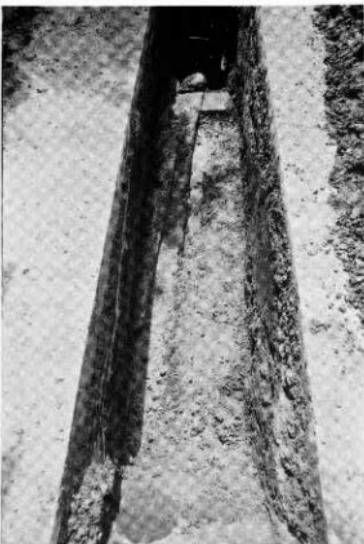
（中島和彦・山前智敬）

**まとめ** 今回の調査は一辺約14m以上の建物基壇と内法約2.6mの円形埠積み井戸を検出した。建物基壇は凝灰岩切石の壇上積み基壇で、大安寺主要伽藍内の建物に匹敵する建物が想定され、また井戸も規模、構造とも前例を見ないものであり、調査地周辺の特殊な性格がうかがわれる。これら遺構の年代は明確ではないが、その構造や使用している埠などから古代のものと考えられよう。天平19年（747年）の大安寺を記した『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』では、今回の調査地である院院地区には建物や井戸の存在を示す記述が見あたらない。今後これら遺構の規模や年代を明らかにしてゆくことが、大安寺旧境内の復原に大きな意味をもつことであろう。

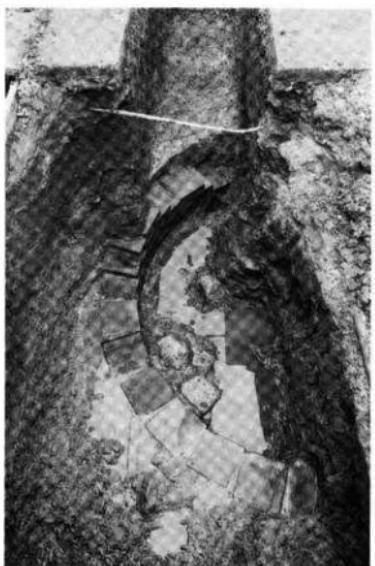
（中島和彦）



基壇A（東から）



基壇B（北から）



堆積井戸S E01（東から）



基壇D（西から）



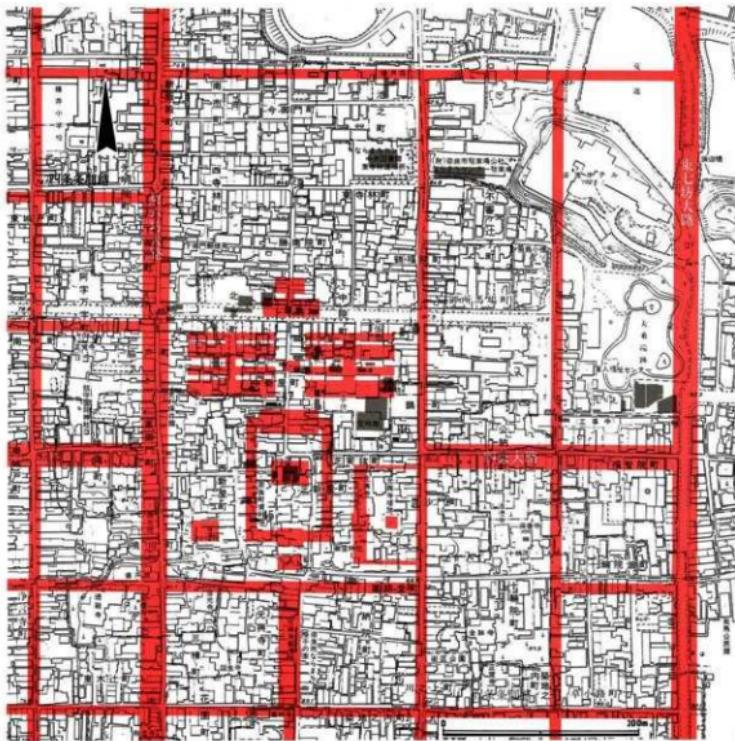
基壇A南壁断面（北から）

## 2 元興寺旧境内の調査

元興寺旧境内では、本年度は第45次～第47次の3件の発掘調査を実施した。第45次調査と第46次調査は個人住宅の建替えに伴う事前調査である。第47次調査は店舗建設に伴う事前の発掘調査である。元興寺の伽藍復原図によると、第45次発掘区は西回廊、第46発掘区は東塔院北方地区、第47次発掘区は講堂隣接地にあたる。いずれも小規模な調査であり、元興寺の伽藍に関連する遺構は無かった。ただし、第47次発掘区では中世の土坑から、巨大な礎石を3個確認した。土坑に廃棄されていたものであるが、その出土位置が講堂に隣接していることから、講堂の基壇に使用されていたものではないかとおもわれる。元興寺講堂の基壇を復原するための、貴重な資料の発見である。

元興寺旧境内発掘調査一覧

調査次数	事業名	申請者名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
第45次	個人住宅建設	浦川二郎	西新屋町6	H10.04.20～H10.06.01	25㎡	中島
第46次	個人住宅建設	狭川真一	越町18	H10.08.27～H10.09.09	35㎡	武田
第47次	店舗建設	福村佳子	中新屋町13	H10.09.24～H10.10.22	37㎡	久保清



元興寺旧境内発掘調査位置図 (1/5,000)

## (1) 西回廊の調査 第45次

調査地は元興寺西回廊にあたり、主要伽藍の廃絶後は町屋となり現在に至っている。西回廊では過去4回の発掘調査が行なわれたが、いずれも回廊は確認されていない。調査地の北側の2つの宅地内の発掘調査(26・30次調査)では近世の鍛冶関連の遺構が多く確認されている。

敷地は東西に長細く、東側半分が段になって約0.4m高い。発掘区画の層相はこの段の東西で違いがある。西側は表土(1~3)の下に整地層(5・6)、焼土層(16)があり、約0.4m下で淡黄褐色砂疊の地山になる。東側は焼土層がなく、整地層(15・22)の下はすぐ地山である。地山の標高は約87.2mで東西の比高差はほとんどない。遺構検出は焼土層と地山上面で行なったが、発掘区画東側では整地土の淡茶褐色土上面で行なった。

検出遺構には溝1条、井戸1基、土坑多数、埋甕2基、羽釜埋納土坑1他がある。いずれも中世後半から近世・近代のものである。以下主なものを記す。

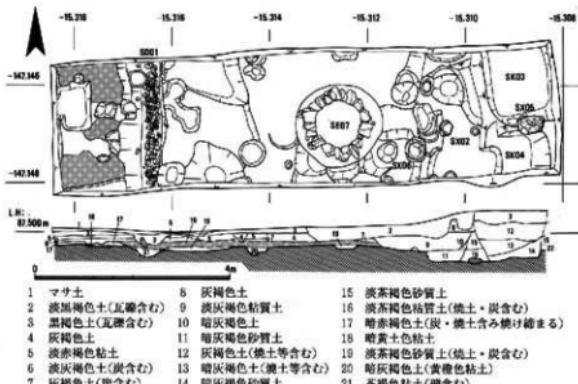
**S D01** 幅約0.7m、深さ約0.15mの南北方向の溝で、焼土層の下で検出した。溝内には拳大の礫や瓦片を敷く。この溝の延長が北側2ヶ所の発掘調査でも確認されており、現在の宅地割りをえた南北約20m以上の溝と考えられる。中世後半の土器が少量出土した。

溝の西側には地面が熱で赤く焼締まった部分が3ヶ所ある。いずれもやや不整形な形で、性格は不明である。南端のものは東西1.3m以上、南北0.7m以上で、深さは約4cmと浅い。埋土は焼土で、底には一面に薄く炭が堆積する。出土遺物が少なく時期は不明である。

**S X02** 土師器羽釜の埋納遺構である。掘形は周辺の近世遺構で肩が破壊されており、規模は不明だが、東西南北1m程の不整形なものと考えられる。羽釜の底の地面を少し窪め羽釜を設置後土を被せその上に粘土を敷く。羽釜の蓋はなかったが、すぐ横に板状の石があり石で蓋をしていた可能性がある。羽釜内には砂が詰まり、刀子が1点出土した。16世紀後半のものである。

**S K03** 東西1.4m、南北1.5m以上の平面方形の土坑で、坑内から焼土と共に鍛冶関連遺物が大量に出土した。出土土器から18世紀中頃のものと考えられる。

**S K04** 東西2.5m、南北1.0m以上の平面方形の土坑で、坑内から鍛冶関連遺物が瓦礫と共に



遺構平面図・北壁土層図 (1/100)

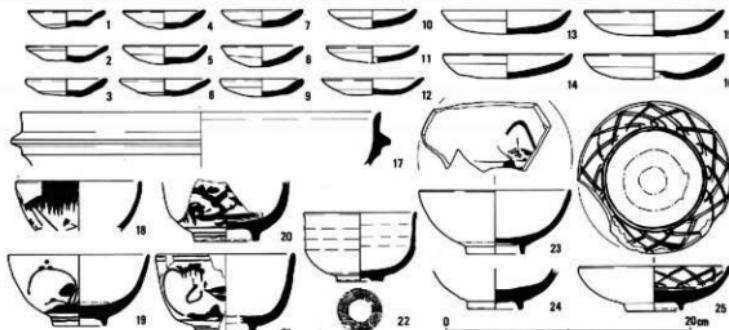
出土した。出土土器から18世紀末から19世紀にかけてのものと考えられる。

S X05 埋甕遺構で、北半分を S K03で破壊される。甕は瓦質土器で復元すると口径約36cm、高さ約46cmで、甕内には甕の破片と土師器皿1枚、銅錢（至和元寶）1枚がおかれていた。

S X06 埋甕遺構で、甕は瓦質土器で復元すると口径約36cm、高さ約36cmになる。

S E07 内法径0.9mの石組井戸である。近現代のもので、掘削は0.4mに止めた。

出土遺物には中世・近世のものがあり、遺物整理箱5箱分の土器と遺物整理箱5箱分の瓦類がある。瓦類には平安時代以降の軒丸瓦・軒平瓦が、3点ずつ出土している。S K03からは鍛冶関連遺物と土器類が出土した。鍛冶関連遺物にはフイゴ羽口約15kg、鉄滓約36kg、炉壁片少量がある。土器は遺物整理箱1箱分で、土師器（1～17）、瓦質土器、国産磁器（伊万里18・19・25）、国産陶器（肥前20・21・23、瀬戸22・24）がある。18世紀中頃のものと考えられる。（中島和彦）



土坑SK03出土土器（1／4）



発掘区全景（東から）



発掘区全景（西から）

## (2) 東塔院北方地区の調査 第46次

調査地は、元興寺旧境内の伽藍復原では、東塔院跡推定地の東辺部分に該当している。調査地のすぐ西北隣の元興寺極楽坊境内地の中では、昭和35・36年の防火壁工事および昭和38年の収蔵庫建設工事に先立つ発掘調査が実施されている<sup>1)</sup>。その折には中世期の墓地跡がみつかり、さらには柿経などの信仰関連遺物が大量に出土した。

今回の調査では、その墓地跡が東側にどの程度広がっているのかを確認し、さらには元興寺に関連する遺構の検出を目的として、東西約8m、南北約5mの規模で発掘区を設定した。

発掘区内の層相は、基本的には盛土以下、暗茶灰色土と続き、現地表面下約1.3mで、橙灰色粘土の地山に達する。発掘区内で検出した地山の標高は、88.2m前後である。遺構検出作業は地山上面で実施したが、一部の遺構については、暗茶灰色土の上面より掘り込まれていることを確認した。今回の発掘調査で検出した遺構には、中世期の土坑1基、近世期の南北方向の溝および土坑がある。以下、主要な遺構について、その概要を記す。

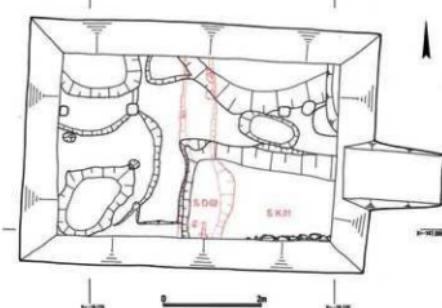
**S K01** 発掘区の南東隅で検出した土坑。一部は発掘区域外へと延びる。発掘区内では東西約3.0m、南北約2.0m分を検出した。遺構の重複関係からみて、後述のS D02よりは古い。検出面からの深さは約0.4mを測る。土坑の南側の発掘区南壁にかかる部分には、径0.1~0.3m程度の小石を列ねた部分がある。埋土からは12世紀頃の土器が出土した。

**S D02** 発掘区中央で検出した南北方向の溝である。幅は0.7~1.0mで、検出面からの深さは0.1~0.2m。溝の両側にはわずかに列石が残存し、護岸用の石であったことを示唆する。遺構の重複関係から、S K02より新しい。埋土からは12世紀頃の土器と近世期の土器が出土した。

この他に、発掘区内では土坑をいくつか検出した。径1.5~3.0m、深さ0.4m程度の規模である。いずれの土坑も埋土から18~19世紀頃の土器が出土した。

調査の結果、当初に想定されていた中世期の墓地跡は確認できなかった。また柿経などの信仰関連遺物についても、今回の発掘区内からは出土しなかった。こうした結果から推測する限りでは、西隣の元興寺極楽坊境内地で確認された中世期の墓地跡は、今回の調査地にまでは及んでいなかったものと考えられる。このほかに、発掘区中央で検出した溝S D02は護岸を施していた痕跡等を考慮すると、近世期の敷地を区画する溝であった可能性もある。  
（武田和哉）

1) (宗)元興寺極楽坊『元興寺極楽坊総合収蔵庫  
(第一収蔵庫)建設報告書』1965



遺構平面図 (1/100)



発掘区全景 (東から)

### (3) 講堂隣接地の調査 第47次

#### I 調査の目的

調査地は、元興寺旧境内の講堂跡の北西にあたり、講堂の北基壇外装か雨落ち溝が推定される場所にあたる。これまで、講堂跡では昭和36・37年に極楽坊境内の防火壁工事に伴う調査が行なわれており、講堂の基壇東北隅を確認したと報告されている。講堂について文献上からは、1035年(長元8年)『堂舎損色檢録帳』『東南院文書』の記載から「十一間瓦葺阿舎(寄棟造)」の建物であり、当時かなり傷んでいたことがわかる。その後の1106年(嘉承元年)『七大寺日記』、1140年(保延6年)『七大寺巡礼私記』で当時大江親通が巡礼した際の講堂の様子が記されており、1216年(建保4年)『諸寺建立次第』でも、講堂についての記載が確認できることから、その頃まで講堂が存在していたことがわかる。しかし、それ以後は、講堂に関する記載は確認できない。なお、1451年(宝徳3年)徳政の土一揆により主要伽藍が焼失した際にも、「大乘院寺社雜事記」等には焼失または焼け残った建物が記されているが<sup>2)</sup>、講堂の名はそのいずれにも見当らないことから、火災以前に倒壊していた可能性が考えられる。なお、室町時代後期の元興寺の絵図には講堂がない。今回の調査では上に述べたように建立及び廃絶時期の不明な講堂に関する遺構の検出を目的とした。

#### II 調査地の層相

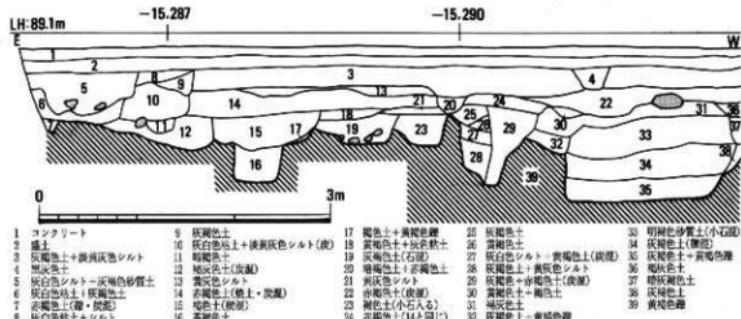
発掘区の層相は近・現代の土坑等によって大きく乱れているが、基本的な層相は、盛上、灰褐色土と淡灰褐色シルトの混合土、赤褐色土(焼土)、淡黄褐色シルト、褐色土と続き、地表下約0.8mで黄褐色疊の地山に達する。地山の標高は概ね88.1mで、遺構は地山上面で検出した。

#### III 検出遺構

検出遺構には、中・近世の土坑・溝がある。以下、主なものについて記す。

**S K01** 東西2.2m以上、南北2.6m以上、深さ0.2mの掘形平面不整形の土坑で、埋土は褐色土で、時期が明確な遺物は出土していないが、重複関係からS K09・11よりも古いことがわかる。

**S K02** 東西2.0m、南北0.5m以上、深さ0.9mの掘形平面不整形な土坑である。掘形底は平坦であり、埋土は下から灰褐色土、黄褐色土と混じりの灰褐色土、明褐色砂質土の順に堆積している。これらの埋土から、14~15世紀頃の土師器皿、瓦質土器、山茶碗、白磁の皿が出土した。重複関



南壁土層図(1/50)

係からSK08・11よりも古いことがわかる。

SK03 東西0.8m、南北0.3m以上、深さ0.7mの掘形平面長円形の土坑である。埋土は下から黄褐色疊混じりの褐色砂、灰褐色砂質土の順に堆積している。時期が明確な遺物は出土していないが、重複関係からSK10よりも古いことがわかる。

SK04 東西0.7m以上、南北0.5m以上、深さ0.6m以上の土坑である。埋土は下から灰褐色砂質土、灰白色土と灰褐色土の混合土、焼土混じりの赤褐色土と灰白色シルトの混合土の順に堆積している。埋土最上層から、北宋錢の景德元寶（初鑄1004年）1枚とふいごの羽口、多量の鉄滓が出土した。重複関係からSK12よりも古いことがわかる。

SK05 東西1.0m以上、南北0.5m以上、深さ0.4mの土坑である。埋土は下から灰褐色土、焼土混じりの赤褐色土の順に堆積し、上層上面には10~20cm大の石と炉壁のようなものが埋まっていた。時期が明確な遺物は出土していないが、重複関係からSK12よりも古いことがわかる。

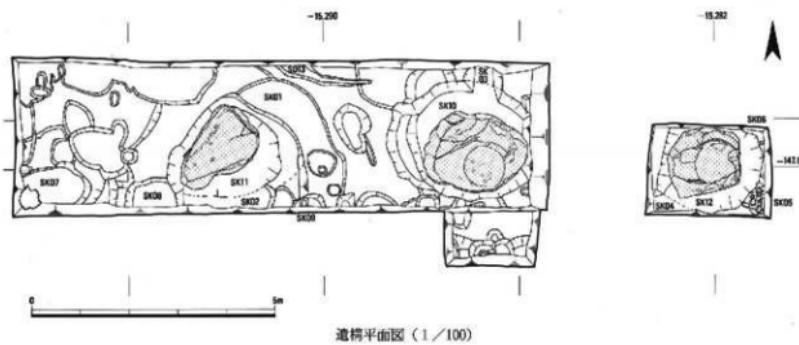
SK06 東西0.6m以上、南北0.3m以上、深さ0.4mの土坑である。埋土は黄褐色疊混じりの褐色土で、時期が明確な遺物は出土していないが、重複関係からSK12よりも古いことがわかる。

SK07 東西1.4m以上、南北0.9m以上、深さ0.4mの土坑である。埋土は下から黄褐色疊混じりの灰色粘土、黄灰褐色土の順に堆積している。上層から、17世紀初頭の土師器皿、羽釜、瓦質土器擂鉢、瀬戸窯天目椀が出土した。

SK08 東西1.9m、南北0.7m以上、深さ0.6mの土坑である。埋土は下から炭混じりの灰褐色土、暗灰褐色土、褐灰褐色土の順に堆積している。これらの埋土から17世紀初頭の土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・深鉢、肥前窯系椀、瀬戸窯皿、備前窯器と12世紀前後の白磁と青磁が出土した。重複関係からSK11よりも古くSK02よりも新しいことがわかる。

SK09 東西0.7m、南北0.3m以上、深さ0.8mの土坑である。埋土は下から灰褐色土と黄灰色シルトの混合土、灰白色シルトと炭混じりの黄褐色土の混合土、黄褐色土の順に堆積している。埋土から、16世紀代と考えられる土師器皿・羽釜が出土した。重複関係からSK01よりも新しいことがわかる。

SK10 東西3.0m以上、南北2.5m、深さ0.9mの掘形平面不整形の土坑である。埋土は下から褐色砂質土、黄褐色疊混じりの褐色砂質土、黄褐色砂質土、灰褐色土の順に堆積している。坑内には安山岩製礎石1個が柱座のある面が上を向いた状態で投棄されていた。埋土からは17世紀初頭の肥前窯系椀、土師器羽釜・皿、瓦質土器擂鉢、信楽窯擂鉢、甕が出土した。重複関係からS



K03よりも新しいことがわかる。

S K11 東西2.9m、南北2.1m、深さ0.9m以上の掘形平面不整形の土坑である。埋土は下から焼土混じりの赤灰褐色土、黄褐色砂質土と灰褐色粘土の混合土、黄褐色砂質土と灰褐色粘土の混合土の順に堆積している。坑内には安山岩製礎石1個が倒れた状態で投棄されていた。埋土からは17世紀初頭の肥前窯系碗、信楽窯擗鉢・甕、瀬戸窯皿、備前窯鉢、中国製青磁・白磁・青花大皿、瓦質土器鉢、上部器が出土した。重複関係からS K01、02、08よりも新しいことがわかる。

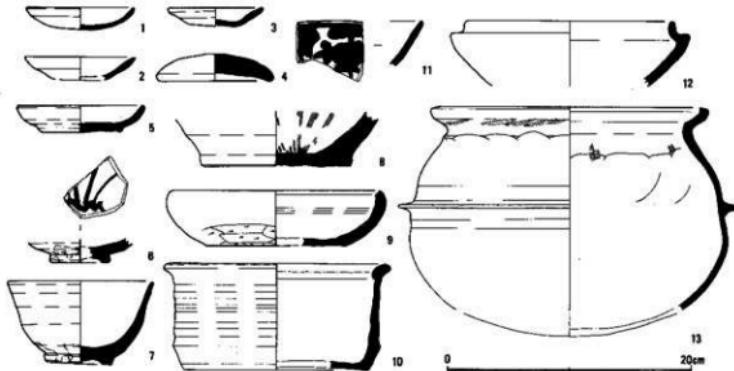
S K12 東西2.3m以上、南北1.8m以上、深さ0.9m以上の掘形平面不整形の土坑である。埋土は下から褐色砂質土、黄褐色礫混じりの暗褐色土、炭混じりの黄褐色土と暗褐色土の順に堆積している。坑内には安山岩製礎石1個が柱座のある面が上を向いた状態で投棄されていた。埋土からは17世紀初頭の上部器皿、羽釜、瓦質土器擗鉢、国産陶器（肥前窯系、信楽窯）、北宋銭の政和通寶（初鑄1111年）が出土した。重複関係からS K04・05・06よりも新しいことがわかる。

S D13 幅0.1~0.5m、長さ2.0m、深さ0.15m、埋土が暗灰褐色土の溝である。（久保清子）

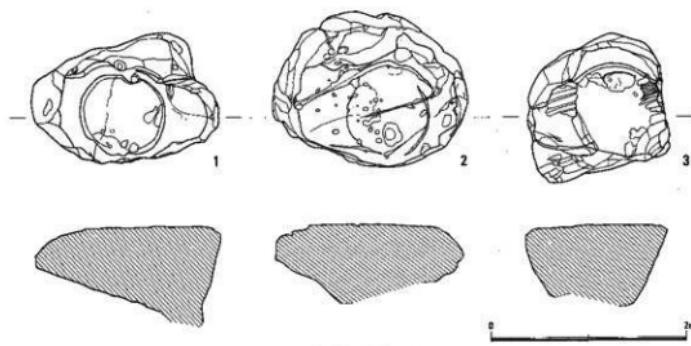
#### IV 出土遺物

中・近世の土器類、奈良～近世の瓦類、錢貨、鉄滓、鋳造関連遺物、礎石がある。以下、主なものについてのみ記す。

土器類 出土土器は遺物整理箱4箱分あり、大半が江戸時代のもので、他に鎌倉・室町時代のものが少量ある。礎石落とし込み坑S K10・11・12からは遺物整理箱1箱分の土器が出土しており、土師器、瓦質土器、国産陶器、輸入磁器がある。いずれも17世紀初頭のものである。1~3は上部器皿で、いずれも口縁部に灯明の煤が付着する。さらに2は内面に朱が付着する。13は土師器羽釜である。頸部以下の体部はタカキで形成し、その後内面を部分的に板ナデで調整する。4も上部器で内外面に布の圧痕が部分的にある。蓋であろうか。5は瀬戸窯の皿で灰釉を内面と外面上に施釉し、見込み部の釉をかき取る。釉をかき取った跡の部分は研磨され非常に平滑である。6・7は肥前窯系の陶器である。6は皿で内外面にない褐色の釉を施釉し、高台外面を露胎とする。見込み部には鉄絵の紋様を描く。7は楕で高台外面まで灰オリーブ色の釉を施釉する。8は信楽窯の擗鉢で、内面には1単位4本の擗目が、見込部分には格子状の擗目が施される。9は肥前窯の鉢である。10は肥前窯系の鉢と考えられる。内外面とも灰オリーブ色の釉を施釉し、縁



土坑SK10・11・12出土土器(1/4)



礎石実測図（1／50）

端部内面のみ露胎である。11は中国製の青花の盤である。12は瓦質土器の鉢で、二次焼成のためか内外面の炭素の吸着が見られない。1・3・8・13はSK10、4・5・7・9～12はSK11、2・6はSK12出土である。  
（中島和彦）

礎石 近世の土坑から礎石が3点出土した。1はSK11から出土。大きさは長辺1.9m、短辺1.2m、厚さ1.1mで、上面には径86cmの柱座が造り出されている。2はSK10から出土。大きさは長辺2.0m、短辺1.6m、厚さ0.8mで、上面にはわずかな高さではあるが、径90cmの柱座が造り出されている。3はSK12から出土。大きさは長辺1.5m、短辺1.4m、厚さ0.8mで、上面には径90cmの柱座が他の2つよりも高く造り出されている。また礎石上面は磨きこまれており、光沢がある。柱座及び上面平端部の一部は削平を受けているが、おそらく、SK12に埋設の際に尖出した部分を削平したものと考えられる。1～3はいずれも柱座横の平端部が細長くのびており、側柱間の地長押があたる部分を削り出していると考えられる。また1は凹凸が著しく、礎石埋設時には根石等を用いて水平に据えるための工夫をしていたと考えられる。1～3の材質はいずれも春日山麓付近で多く産する安山岩（俗稱カナンボ石）である。

## Vまとめ

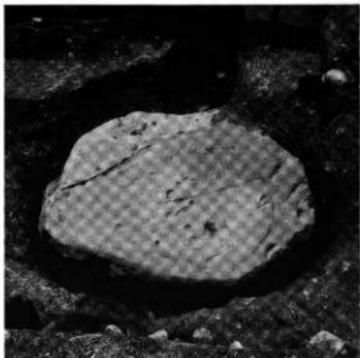
今回の調査では、講堂に関連する遺構ではなく、さらに調査区南側を一部拡張したが、中近世以降の土坑があるのみであった。しかし、近世初頭に奈良町の整備に伴い、現在の場所に礎石が移動させられていたことがわかった。礎石の大きさや重量を考えると講堂の基壇を削平、整地する際に北側に穴を掘って落とし込んだものと考えられる。同様に金堂跡や鐘楼跡、僧坊跡でも、同じ時期に整地のために花崗岩製の礎石もしくは礎石とみられる安山岩が穴の中に落としこまれている。このことから他の伽藍跡地周辺でも今後礎石が出土する可能性が高くなつたといえよう。また、今回礎石落とし込み上坑よりも古い時期の土坑埋土から铸造関連遺物が出土したことから、講堂施設後、礎石を移動させるまでの間、この付近に铸造関連遺構が存在する可能性が高いこともわかつた。

（久保清子）

- 元興寺伽藍発掘調査「元興寺伽藍発掘調査報告書」1965
- 岩城勝利「前編」『奈良寺跡研究資料』上巻 1983
- 岩城勝利「後編」『奈良寺跡研究資料』中巻 1983
- 「小六月野跡図」「西院御跡」、『大乗院跡遺跡』
- 「中興園跡」「奈良坊山跡」「中之町町」「平城坊目跡」によれば天正・永禄年間(1558～1592年)頃から伽藍跡に町屋が築かれたとする。
- 奈良市教育委員会「元興寺令堂跡発掘調査報告書」1975
- 奈良市教委員会「元興寺山跡内発掘調査報告書」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度』1981
- 奈良市教委員会「僧坊施設地、西北行大房の調査 第38回：『奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成3年度』1994



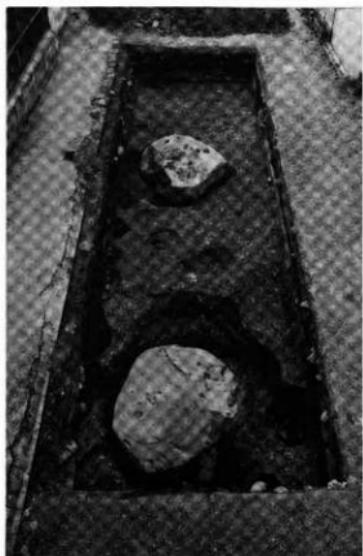
発掘区全景（西から）



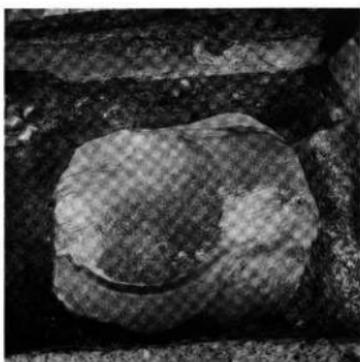
礎石1 (SK10出土・南から)



礎石2 (SK11出土・北西から)



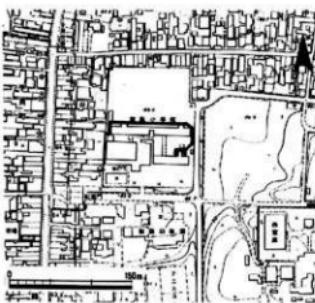
発掘区全景（東から）



礎石3 (SK12出土・北から)

### 3 史跡東大寺旧境内の調査 第10次

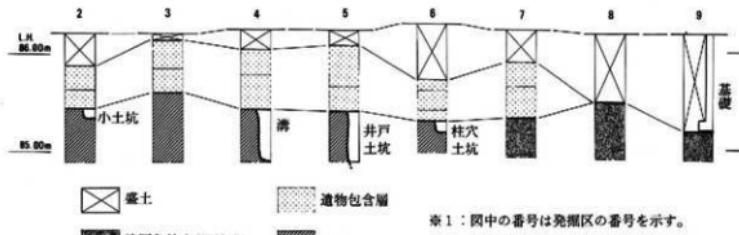
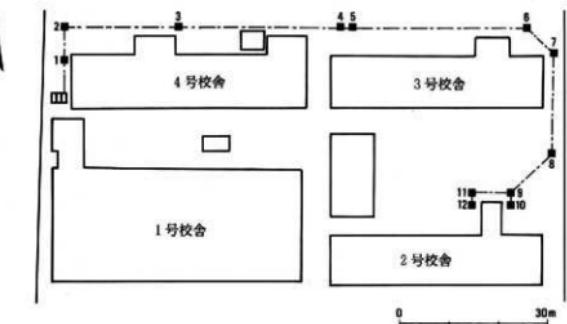
- 1 事業名 鼓阪小学校大規模改良工事  
 2 通知者名 奈良市長 大川靖則  
 3 調査次數 東大寺第10次調査  
 4 所在地 奈良市雜司町97  
 5 調査期間 平成10年8月3日～8月10日  
 6 調査面積 37m<sup>2</sup>  
 7 調査担当者 鐘方正樹・安井宣也



発掘区位置図 (1/6,000)

#### 8 調査概要

調査地は史跡東大寺旧境内の北西部にあたり、奈良時代の錢院が推定されている。平安時代以降は尊勝院となり、室町時代以降は惣持院に改められて明治に至っている。本調査は校舎の北側から東側へ至る電線の埋設工事に伴うもので、地下遺構への影響が大きい12箇所のハンドホール部分（掘削深度：現G.L.-1.3m）で発掘区を設定し調査を実施した。



上：発掘区配置図 (1/1,000) 下：主要発掘区土層柱状図 (1/50)

※1：図中の番号は発掘区の番号を示す。

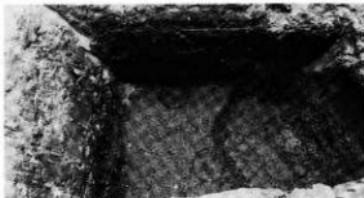
※2：上図の1点鎖線は路筋を示す。



第2発掘区（北から）



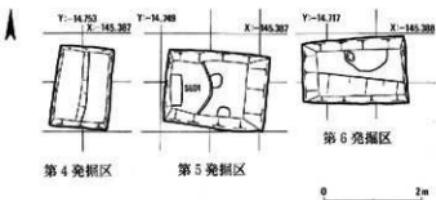
第4発掘区（北から）



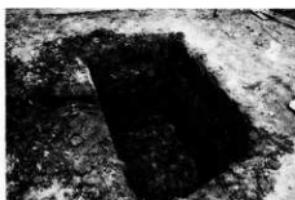
第5発掘区（北から）



第6発掘区（西から）



第4～6発掘区遺構平面図（1／100）

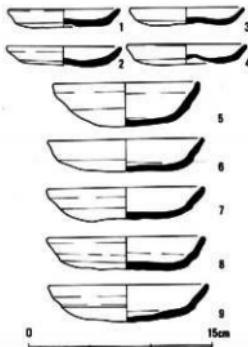


第8発掘区（南西から）

**第1～6発掘区** 4号校舎西側の第1発掘区は過去の工事による擾乱を受けていたが、3・4号校舎北側の第2～6発掘区は0.7～0.9mの盛土・遺物包含層の下で地山を確認した。地山上面で造構検出を行なったところ、第2発掘区では小土坑を、第4発掘区では溝を、第5発掘区では鎌倉時代の井戸SE01と小土坑を、第6発掘区では柱穴と土坑をそれぞれ確認した。井戸SE01の枠内からは整理箱1箱分の土器器皿が出土した。

**第7～12発掘区** 3号校舎東側の第7・8発掘区と2号校舎北東隅の第9・12発掘区は0.7～0.9mの盛土・遺物包含層の下に中近世の土器や瓦の細片、木片を含む湿地成の暗灰色粘土がみられる。第10・11発掘区は過去の工事による擾乱を受けた状態であった。

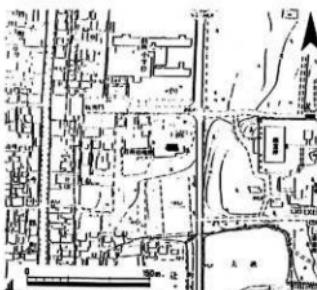
以上のことから、北校舎北側の運動場付近は平安～鎌倉時代の尊勝院に関連する造構が残存する可能性がある。校舎東側は層相から中近世には湿地であったと考えられる。 (安井宣也)



井戸SE01出土土器（1／4）

## 4 史跡東大寺旧境内の調査 第11次

- 1 事業名 鼓阪幼稚園園舎建築事業
- 2 届出者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 東大寺第11次調査
- 4 所在地 奈良市雜司町355番地
- 5 調査期間 平成10年9月25日～10月30日
- 6 調査面積 105m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 立石堅志・細川富貴子

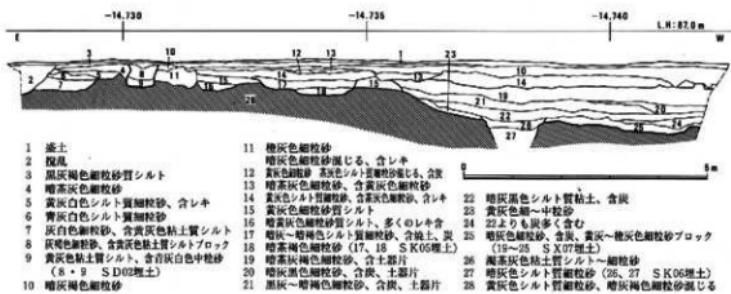


発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、東大寺旧境内の北西部、転害門から正倉院へ通じる東西道路の南側に位置し、転害門から南東へ約120mの地点にある。現在は幼稚園の敷地内である。周辺での調査例には、調査地の北側にある鼓阪小学校の調査（市第1次）と、転害門のすぐ北側で行なわれた西面大垣の調査（市第9次）、調査地から西へ約100mの地点での調査（奈良県教育委員会 第10次）がある。市第9次の調査では西面大垣の築成土などを検出しているが、築地本体は削平をうけた可能性が高い。尊勝院の敷地とされている鼓阪小学校の調査では、院に関連した遺構は確認しておらず、県による調査でも顕著な遺構は検出されていない。転害門周辺には、絵図などから多くの塔頭が存在したことが知られる。当該地は「奈良町絵図」（天理図書館蔵）によると、北林院という塔頭があった場所に相当するが、その規模、創建時期などは不明である。今回の調査ではそれらに関連した遺構の検出が期待された。発掘区は園舎建築予定地に設定した。

調査地周辺の地形は、南東から北西に向かって低くなっている。調査地の層相は、発掘区中央の東西で異なる。東側では盛土、暗灰褐色細粒砂、黃灰色細粒砂質シルトと続き、現地表下0.4～0.6mで黃灰色シルト質細粒砂の地山に至る。西側は盛土から暗灰褐色細粒砂までは東側と同様で、以下さらに黒灰～暗褐色細粒砂、暗灰黑色シルト質粘土、黃灰色細～中粒砂、暗灰色細粒



地盤土層図 (1/100)

砂と続き、現地表下0.8~1.5mで黄灰色シルト質細粒砂の地山に至る。地山上面の標高は東側で約85.6m、西側で約84.9mで、南東から北西へ低くなっている。

検出遺構には、掘立柱建物1棟、溝1条、土坑4がある。建物は黄灰色細~中粒砂上面で検出したが、それ以外は、すべて地山上面で検出した。以下、概略を述べる。

S B01 発掘区西で東西1間(2.1m)分、南北2間(3.3m)分を検出した掘立柱建物である。南北方向の柱筋は、国土方眼方位北で東へ4°振れている。柱穴から12世紀後半頃の瓦器が出土した。

S D02 発掘区東で検出した溝である。幅0.6~0.8m、深さ0.1~0.2m。重複関係から見て、後述するSK 03、04よりも新しい。

S K03 発掘区東で検出した埋甕遺構である。東西1.0m、南北0.9m、深さ0.6mの平面円形の掘形に胴径0.9mの備前焼の甕が埋められており、その用途は不明である。本米の掘形はもう少し深かったと思われるが、後述するSK 04削削時に削られて浅くなっている。甕の口縁部も欠損しており、残存高は0.8mである。甕内から15世紀後半の土器類が出土した。

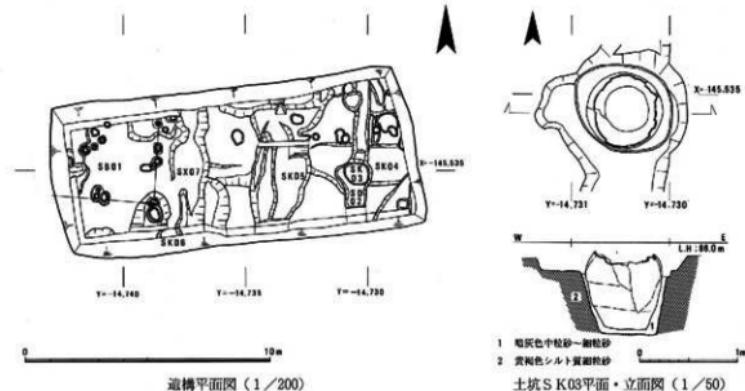
S K04 SK 03と重複して検出した東西4.0m、南北2.0m、深さ0.1mの土坑である。

SK 03の甕の口縁部や体部、甕内と同時期の遺物が出土していることから、SK 03廃棄時に伴う遺構と思われる。

S K05 発掘区東で検出した東西2.3m、深さ0.2~0.5mの土坑である。発掘区内での南北長は5.0mだが、発掘区外南側へ続くため溝とも考えられる。埋土には焼土や炭が混じる。11世紀後半~12世紀後半の土器類が出土した。



発掘区全景（東から）



遺構平面図 (1/200)

土坑SK03平面・立面図 (1/50)

**S K06** 発掘区西側の壁際で検出した上坑である。発掘区内では、東西1.0m、南北0.3mの半円形の掘形だが、発掘区外へ続き平面円形になると思われる。深さは0.5m以上あるが、湧水し崩壊の危険があるためそれ以上掘削できなかった。井戸になる可能性も考えられる。

**S X07** 発掘区のほぼ中央で検出した。南北4.8m以上、東西5.0m以上、深さ0.3~0.7mで、東から西に向かって低くなる落込みである。埋土には炭が混じり、中世と奈良時代の土器類が混在して出土した。東から西へ低くなる地形を雑段状にして利用する造成である可能性があり、周辺での土地利用を知る手がかりになると思われる。

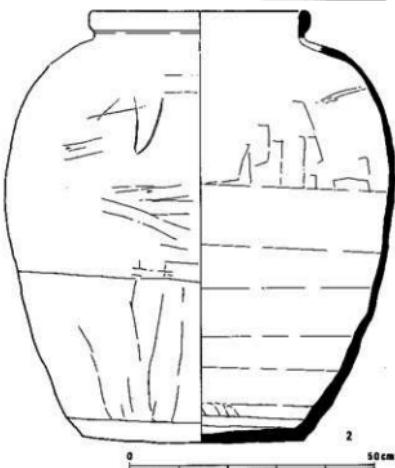
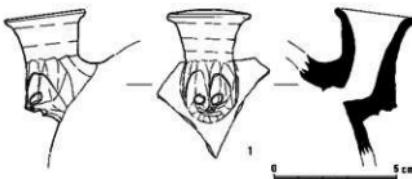
焼土や炭は S K05、S X07埋土の他に S D02東側の浅い窪みの埋土にも見られた。また S K05周辺の地山には焼土の混じる部分があり、調査地近辺で火災のあった可能性が考えられる。

出土遺物には瓦類、土器類がある。瓦類には軒平瓦、軒棟瓦、鬼瓦、文字瓦、丸瓦、半瓦などが遺物整理箱1箱分ある。時期は江戸時代のものが多い。文字瓦は、平瓦の凹面に「大佛口」と刻印があるので、おそらく「大佛殿」となろう。これら瓦類は包含層、攪乱から出土しており、遺構から出土したものはない。土器類には上師器、須恵器、施釉陶器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶器が遺物整理箱6箱分と、S K03の陶器甕がある。土師器、須恵器には一部奈良時代のものもあるが、ほとんどが中世のものである。以下、図示したものについて述べる。1は包含層出土の淨瓶の注口部で、口径3.4cm、注口部の高さ4.5cmである。上半部はロクロナデで調整し、下半部は手持ちヘラケズリの後に人面と思われる線刻を施す。上器類での類例は見つけられなかったが、正倉院と法隆寺に人面注口のある佐波理水瓶が伝わっている。<sup>2)</sup>これらは共に、トルコ・イラン系の人の顔を表わしていると言われており、髪や髪の毛まで丁寧に表現するものである。今回出土した淨瓶の注口は、これらの稚拙な模倣と考える。2は S K03に掘え置かれた備前焼の大甕である。口径45.0cm、高さ87.4cmに復原できる。口縁端部は卡縁状で、肩部に記号のような線刻がある。15世紀のものと思われる。

今回の調査では絵図にある塔頭との関係を示すような結果は得られなかった。ところで、S X07を当該地の斜面を造成し、利用するための段差と考えるなら、造成の時期や、その目的など不明な点は多い。今後の調査に期待するところが大きい。(細川富貴子)

1) 「堂坊坊会団」「奈良公歴史」奈良公歴史編集委員会 1982

2) 「日本仏教美術の源流」奈良国立博物館 1988 「正倉院宝物 南倉」朝日新聞社 1989



包含層・SK03出土土器 (1は1/2、2は1/10)

## 5 薬師寺旧境内 花苑院推定地の調査 第8次

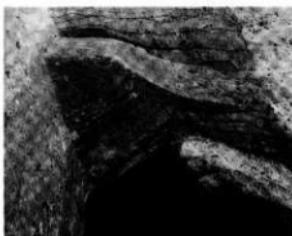
- 1 事業名 市道西の京六条線道路新設工事  
 2 通知者名 奈良市長大川靖剛  
 3 調査次數 薬師寺第8次調査  
 4 所在地 奈良市西の京町418-19・20・21  
 5 調査期間 平成11年1月11日～2月12日  
 6 調査面積 168m<sup>2</sup>  
 7 調査担当者 三好美穂・原田香織



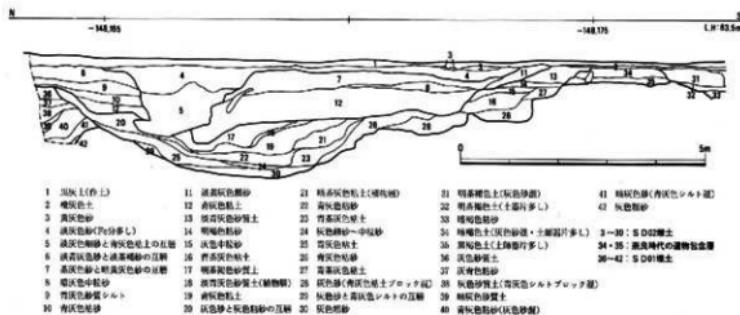
発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

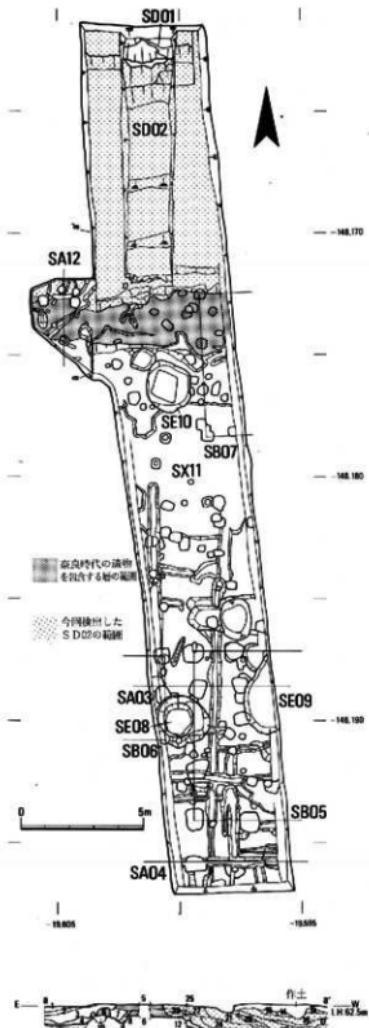
当該地は薬師寺旧境内の花苑院推定地内に相当し、調査地北端には六条大路が想定されている。花苑院推定地内の調査は、昭和50年度に国が行っており、六条大路南側溝、土坑を検出している。平成6年度には本市教育委員会が市薬師寺第7次調査を実施しており、奈良～平安時代の遺物を包含した土坑2を検出している。今回は、六条大路南側溝及び花苑院推定地内の様相を明らかにすることを主目的とした。発掘区内の層相は、発掘区北端では作土の下がすぐに砂と粘土の互層、発掘区中央付近では、作土の下には奈良時代の遺物の包含層が堆積し、地表下0.4mで地山面（標高約62.3m）になる。発掘区中央以南は、奈良時代の包含層は削平され、作土の下には灰黄色砂質粘土、黄灰色粘土が堆積し、地表下0.7mで地山面（標高約61.9m）に達する。遺構は、発掘区中央以北では奈良時代の遺物を包含する暗褐色土上面と地山上面で、南半部は地山上面で検出した。



溝 S D01・02上層堆積状態（西から）



溝 S D01・02内土層図 (1/100)



遺構平面図(1/200)・発掘区西壁土層図(1/100)

検出した主な遺構には、六条大路南側溝(S D01)、奈良時代の掘立柱列(S A03・04)、掘立柱建物(S B05~07)、井戸(S E08~10)、溝状遺構(S X11)、平安時代以降の流路(S D02)、掘立柱列(S A12)等がある。

S D01は、S D02と重複して検出した。S D01は、S D02に一部破壊されおり南肩部の状態は不明だが、南北幅1.2m分までを確認した。北端は発掘区外へと続く。検出面からの深さ約1.2mまで掘り進めたが、溝底を検出することはできなかった。埋上からは奈良時代の瓦類、土器類が少量出土した。

掘立柱建物は、柱掘形の一辺が0.7~0.9mと比較的大きいものが見られる。S B05は、南北4間東西2間以上の南北棟建物になる。S E08と重複して検出しており、重複関係からS B05の方が古いことが判る。S B05の柱根は、すべて抜き取られている。南側柱列の抜取り穴からは、奈良時代の瓦類、土器類、土馬頭部片・脚部片が遺物整理箱で合計3箱分出土した。土器類は、小片が多く詳細な時期は不明だが、奈良時代前半~中頃のものであろう。S B06もS E08と重複して検出しており、重複関係からS B06の方が古いことが判る。南北2間、東西1間以上の東西棟建物になると考えられる。S B07は、奈良時代の包含層の下で検出した東西2間以上、南北3間の南北棟建物。建物の主軸は、国上方眼方位北に対し若干西へ振れる。柱掘形内には、黒褐色土が堆積しているものが多い。

掘立柱列は2条検出したが、S A04は建物になる可能性がある。S A03は、S B06とS E09と重複しており、両遺構よりも古いことが判る。S A03の東・西側は、それぞれ発掘区外へと続く。

井戸は3基検出したが、S E10の井戸底に腐食した隅柱が残存していたのみで、大半のものは抜き取られたと思われる。S E08の掘

形は、東西2.3m、南北2.0mの平面橢円形で、検出面からの深さ約1.8mを測る。掘形は二段掘りされており、検出面下1.4mから東西1.2m、南北1.3mの方形掘形となる。埋土は大きく3層に大別でき、上層から黒灰色粘土（淡灰色粘土ブロック混）、黒灰色粘土と暗灰色粘土の互層、灰色中粒砂（青灰色粘土・黒色粘土ブロック混）である。各層から奈良時代前半～中頃の土師器・須恵器、瓦類が出土した。S E09の掘形は東西1.3m以上、南北3.2m。検出面から深さ1.8mまで確認したが、湧水が著しく壁面が崩壊したため途中で断念せざるえなかった。井戸枠の部材と思われる縦板の一部を確認した。埋土からは奈良時代の土師器・須恵器片が出土したものの詳細な時期は不明である。S E10の掘形は、東西1.8m、南北2.1mの平面方形で、検出面からの深さ約1.8mを測る。検出面下約1.6mのところで、東西1.0m、南北1.1mの方形の井戸枠痕跡と隅柱を検出したが、隅柱は腐蝕が著しく詳細は不明である。井戸枠を抜き取った穴から、奈良時代前半～中頃の土師器・須恵器、瓦類が出土した。

溝状遺構S X11は、S E10・S B07と重複して検出しており、重複関係から両遺構よりも古いことが判る。南北幅約5.5m、東西幅は5.0m分までを検出したが、東・西端はそれぞれ発掘区外へと続く。検出面からの深さは、0.1～0.2mと浅い。S X11内には、非常に細かい奈良時代の土師器・須恵器を多量に包含した黒褐色粘土が堆積する。堆積土の状態からみて一挙に埋められたものと考えられ、整地上の可能性も考慮に入れる必要があるだろう。

S D02は、奈良時代の遺物を包含する第34層（暗褐色土）上面で検出した南北幅約11.0m以上、東西5.5m以上の巨大な流路で、検出面からの深さは約2.3mを測る。埋土の状態からみて、少なくとも3時期以上の変遷があったことが判る。各層からは、奈良時代～室町時代の土器類、瓦類が整理箱で4箱分出土した。しかし、昭和50年度に行われた国調査では、S D02に続く流路らしき遺構は検出されておらず、両調査地間が約45m離れているにせよ、S D02がどういった状況で東西に続いているのかは明かではない。今後の周辺の調査成果を待って検討していくたい。

今回の調査では、S E10から南半部は、全体的に一段低く（高低差約0.4m）削平されていることが明らかになった。削平された詳細な時期は確定しがたいが、削平後に堆積した層（第31・32層）には12世紀頃の瓦器片が包含されており、この時期を前後する時に土地の改変が行われたのではないだろうか。何の目的に伴うものは判断しかねるが、S D02と平行に削平されている点は注目しておくべきであろう。流路の堤を築くために南側を下げた可能性も考えられるからである。この点についても、周辺調査の成果を待って検討すべき課題の一つである。

S A12は発掘区中央付近で検出した掘立柱列で、重複関係から今回の調査地内では一番新しい遺構であることが判る。柱掘形の一片は約0.3～0.4m、検出面からの深さはいずれも約0.1mと浅い。南側の柱掘形の底には礎板と考えられる礎が置かれていた。柱間寸法は2.1m、建物になる可能性もある。出土遺物がないため詳細な時期は不明。

（三好美穂）

**出土遺物** 奈良時代～室町時代の土器類、瓦類、土製品が遺物整理箱で8箱分あり、そのうちの大半がS D02からの出土である。井戸内からは、量的には多くはないが、奈良時代の遺物が出土しており、花苑院内の様相の一端を知る大きな手がかりとなろう。

**瓦塼類** 遺物整理箱で3箱分ある。軒丸瓦4点、軒平瓦2点、熨斗瓦15点、埠2点があるほかは丸瓦・平瓦である。軒瓦はすべてS D02から出土した。軒丸瓦の内訳は6276A 1点、平安時代以降3点である。軒平瓦の内訳は型式不明1点、平安時代以降1点である。以下、平安時代の軒瓦4点について述べる。1は単弁蓮華紋軒丸瓦である。この瓦の特徴は中房は平坦で、中房蓮子に周環がある。中房の周囲に雄蕊帯が巡る。弁の先端は丸く、間弁が太いといったことがあげら

れる。胎土はやや粗く、焼成は堅く、色調は外面黒灰色、内面灰白色である。瓦当裏面はユビナデ調整する。雄芯帯のある軒丸瓦は薬師寺では後期II<sup>1)</sup>(1080~1150)、興福寺ではVI期(1078~1103)に比定されているので、この瓦は平安時代後期のものであると思われる。薬師寺境内では初出の瓦である。1点出土した。他の2点は、中房付近の破片であるが、摩滅がひどく紋様は不明のもの1点、中房のみの破片1点である。軒平瓦は梵字紋がはいったものである。薬師寺285・286型式に類似する。右端が残存しているのでキヤ(空)の部分であると思われる。

(山前智敬)

**土器類** 遺物整理箱で7箱分ある。大半が奈良時代の土師器・須恵器で、その他に製塙土器、土馬、平安時代の土師器・瓦器、室町時代の瓦質土器がある。ここでは、SD02、SE08・10出土遺物について記す。

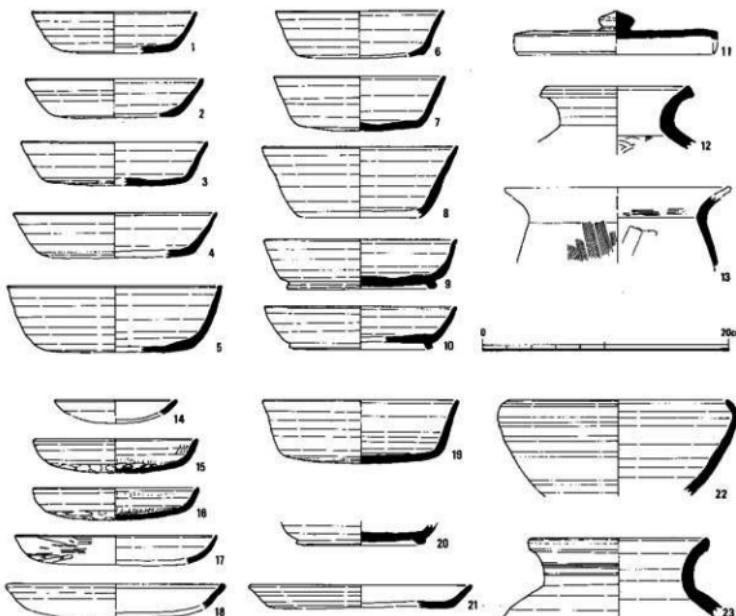
**SD02出土土器** 出土量は整理箱1箱分に満たず、小片が多い。今回は図化しなかったが、出土遺物の内訳を記しておく。奈良・平安・室町時代のものがあり、その中でも比較的目につくのは、平安時代後半の瓦器碗・皿の破片と室町時代の瓦質土器である。奈良時代のものは僅かである。SD02は、溝内の堆積状態から大きく3時期以上に分けられ、各時期に対応する層にはそれぞれの時代の遺物が含まれていたが、多くは第17層~30層に集中していた。

**SE08出土土器** 井戸内埋土から遺物整理箱で約1箱分出土した。内訳は、土師器杯A、皿A、碗C、壺、須恵器杯A・B・E、壺、壺A蓋、壺である。

土師器は大半が小片で摩滅が著しく、壺(13)以外のものは図化できなかった。13は口頸部から体部にかけての破片である。体部外面には縦方向のハケメ、体部内面には縦方向のケズリ、口縁部内面には横方向のハケメで調整している。体部外面には焼成後に火を受けた痕跡が見られる。河内~攝津地域でよく見られる特徴の壺である。須恵器は杯類が多い。杯A(1~4、6~8)は、口径13.5~16.7cm、器高3.2~5.0cmまでのものがある。口径13.5~15.0cmの範囲にある杯Aの中には、器高が深いもの(6・7)と器高が浅いもの(1・2)が見られる。底部外面の調整には、ロクロケズリを施すもの(3・4・6・8)とヘラキリ後不定方向のナデを施すもの(2)がある。6は底部外面~口縁部外面中半までロクロケズリで調整している。1・7はヘラキリの今まで放置していると考えられるが、後に摩耗痕跡が底部外面に及んでいるため詳細は不明。いずれも焼成は良好。1は口縁部内面に漆が付着しており、漆塗り用のバレットとして利用されたのであろう。3・6・7の底部内面は、滑らかな指触りで、調整痕が摩耗している部分も認められる。何らかの使用痕跡と考えられる。杯Bは、9が口径15.8cm、器高4.1cmを測り、底部外面をヘラキリ後不定方向のナデ、口縁部内外面はロクロナデ、底部内面は不定方向のナデで調整している。10は口径15.8cm、器高3.6cm、底部外面はヘラキリ、口縁部内外面はロクロナデ調整。底部内・外面と高台端面は滑らかな指触りである。杯E(5)は平らな底部とやや内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部が少し内傾している。底部外面中央付近はヘラキリ後縦方向にケズリを施し、口縁部内外面はロクロナデ調整である。ミガキは見られない。口縁端部には重ね焼き痕跡が残る。焼成は良好。11は壺A蓋の頂部の破片で、頂部外面には自然釉が厚くかかっていて詳細が判らないが、頂部から縁部が屈曲する付近はロクロケズリで調整されている。焼成は良好だが、見た目の出来ばえは良くない。胎土には白色微粒石が目立つ。12は短頸壺で、口径12.5cm。口縁部内外面はロクロナデ、僅かに残存する肩部には叩き成形の痕跡が残る。これらの土器群は、形態的特徴や法量などからみて奈良時代前半~中頃の土器群と考えられる。



流路SD02出土軒丸瓦(1/4)



井戸 S E 08・10出土土器 (1 / 4)

S E 10出土土器 遺物整理箱で1/2箱分ある。内訳は、十師器杯A・C・E、皿A、皿、盤、高杯、壺、製塙土器、須恵器杯A・B、杯または皿の蓋、壺、鉢A、壺である。土師器、須恵器ともに小片で図化できないものが多い。

上師器杯Aには一段の斜放射状暗文を施すものやb. 手法で調整されているものがある。杯C (15・16) は、口径13.4、13.6cm、器高2.6、2.7cmを測る。内面にラセン状暗文+一段の粗い斜放射状暗文があり、いずれもa. 手法。皿A (17・18) は口径16.5、17.9cmを測る。17はb. 手法、18はa. 手法である。須恵器杯A (19) は底部外面はロクロケズリ、口縁部外面はロクロナデ調整である。杯B (20) は底部外面から体部下半にかけてロクロナデで調整しているが、底部外面中央にはヘラキリ痕跡を残す。皿C (21) の底部外面は不定方向のナデで調整している。口縁部がかなり外傾している。鉢A (22) は体部半ばから下半にかけてロクロケズリで調整されているが、ヘラミガキは見られない。蓋 (23) は口頭部に3条の圓線が巡り、口縁部外面はロクロナデ調整である。

これらの土器群の時期は、土師器食器類 (14・17・18) や須恵器食器類 (20・21) の特徴から見て8世紀末～9世紀初頭頃のものと考えられが、15・16・19などはそれよりも古相の要素を持っているように見える。河内地域では暗文をもつ土師器は、9世紀まで確実に残っていることが最近の研究成果により知られているので、少なくとも15・16については混入ではなく、他の土器と同時期と考えることも可能であろう。

(三好美徳)

1) 東京国立文化財研究所『奈良寺免掘調査報告』(『奈良國立文化財研究所学報45巻』) 1987

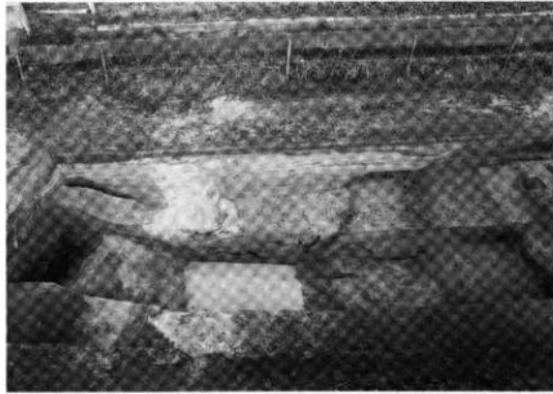
2) 井戸中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『佛教藝術194号』毎日新聞社 1991



発掘区全景（南から）



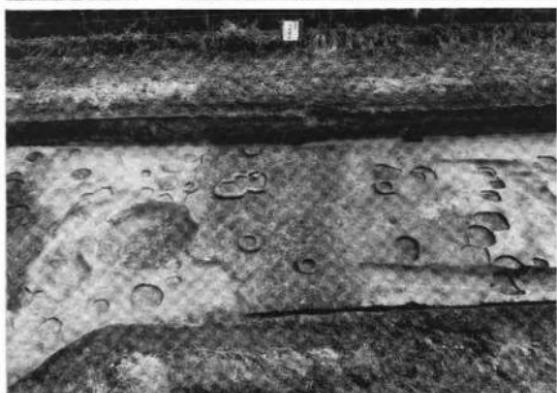
発掘区全景（北から）



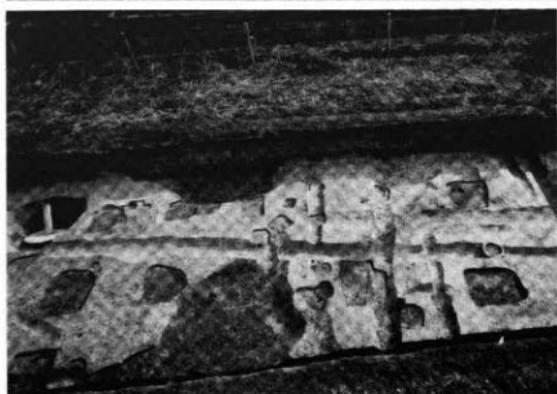
流路 S D02全景（西から）



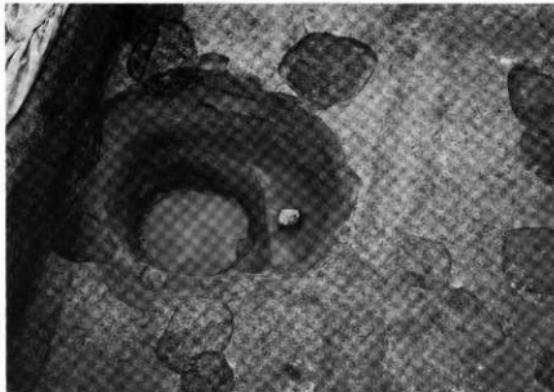
発掘区中央部の様相（西から）



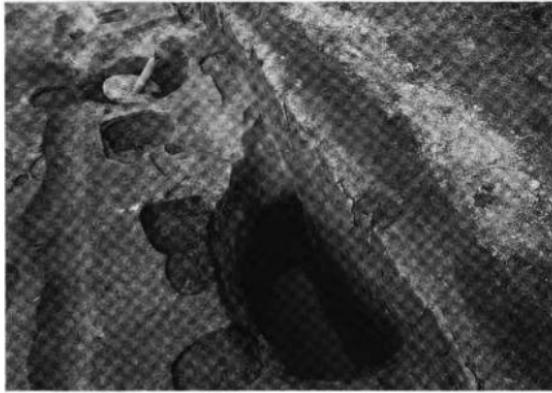
井戸SE10・SX11（西から）



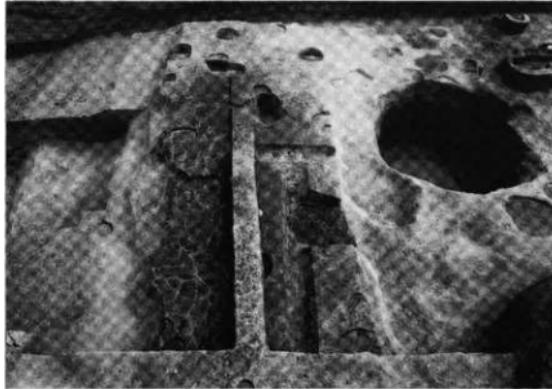
発掘区南端部の様相（西から）



井戸S E08全景（南から）



井戸S E09全景（南から）



井戸S E10全景、奈良時代包  
含層を除去した状態（西から）

### III その他の調査

## 1 正暦寺旧境内の調査 第1・2次

- 1 事業名 市道東部301号線道路改良工事  
2 通知者名 奈良市長 大川靖則  
3 調査次数 正暦寺第1・2次調査  
4 調査地 奈良市菩提山町地内  
5 調査期間 第1次 平成8年8月21日～  
12月25日  
第2次 平成9年5月26日～  
8月29日  
6 調査面積 第1次 517m<sup>2</sup>  
第2次 578m<sup>2</sup>  
7 調査担当者 三好美穂  
8 調査概要

本調査は、市道東部301号線の道路改良事業に係わって実施した発掘調査である。調査地は、平安時代に建立された正暦寺旧境内に相当しており、境内に開発の手が及んでいない事や今なお当時の姿を偲ばせる石垣が随所に見られることなどから、遺跡が良好な状態で残存していることは充分に予想された。

発掘調査は、道路建設予定地（約1,800m<sup>2</sup>）を対象に、平成8年度から2カ年にわたって調査を行い、8年度は7箇所、9年度には4箇所の発掘区を設定して実施した。

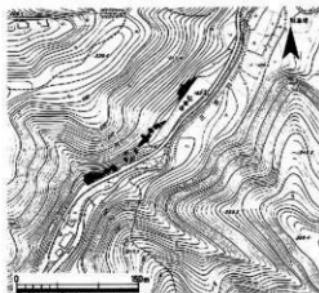
調査の結果、施餓鬼堂の基壇と礎石建物、石造物を利用した石垣、掘立柱建物、井戸、石組造構、石組溝などを検出することができた。とりわけ、石造物を利用した石垣は全国でも検出例がなく、貴重な成果となった。調査が進む中、奈良市教育委員会では遺跡の重要性から遺構の保存を要望した。これを受けた道路建設課は、菩提川町自治会及び地元住民の理解のもとに、道路建設位置の当初計画を変更し、遺構を現地保存することとした。以下に、調査内容及び主要遺構の概要を記す。

正暦寺は、春日山南端の山中に広がる山岳寺院で、正暦三年（992）に一条天皇の勅願寺として創建されたと伝えられており、中尾谷を流れる菩提山川の両側の山地を切り開いて伽藍を造営している。江戸時代に描かれた「和州添上郡菩提山絵図」によると、菩提川の右岸には金堂、鐘楼、三重塔、僧坊等が、左岸には講堂、十三重塔、経蔵、薬師堂、僧坊等が見られる。盛時には、僧坊八十六坊を擁する大伽藍であったようであるが、草創期のことは不詳である。

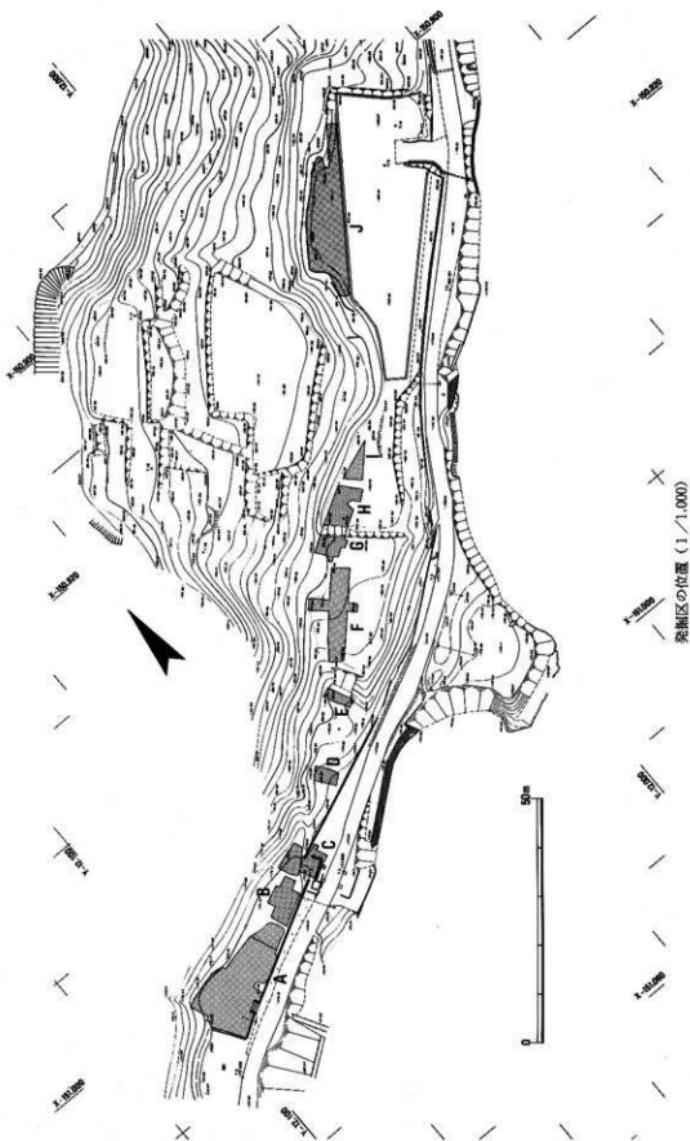
今回の調査地は、この絵図によると、菩提川の右岸にある施餓鬼堂、惣門、普門院に相当するところである。調査地内には平坦に整地されている所が5箇所認められたため、その部分を中心調査を行うことにした。

平成8年度には、Ⅲ境内の遺構の残存状態の確認を目的として、施餓鬼堂跡地（A・B発掘区）、惣門跡の横（C発掘区）、普門院推定地（H発掘区）及び普門院推定地西側の隣接地の平場（D・E・F・G発掘区）にそれぞれ発掘区を設け実施した。平成9年度にはA発掘区の下層調査と普門院の未発掘部分にI・J発掘区を設定して行い、調査面積は合計1,095m<sup>2</sup>である。

調査地点が10箇所にも分かれたため、ここでは施餓鬼堂地区、惣門地区、普門院地区、平場地区と仮称名を与え、地区ごとに説明することにする。



発掘区位置図（1/6,000）



### 施餓鬼堂地区（A・B発掘区）

第1次調査 施餓鬼堂は、正暦寺の正門（惣門）の外側に位置する建物で、江戸時代の絵図によると、三間四面の規模を有す瓦葺き建物であったことが判る。また、昭和初年頃に撮影したといわれている施餓鬼堂の写真資料では、施餓鬼堂は大人の背丈ほどの土壇上に建立されており、一間四面の瓦葺き建物であったことが判る。この土壇は現在も残っており、東西約35m、南北7～8m、高さ1.1～1.5mの規模で、西面と南面は自然石を使用して石垣にしており、途中には階段が構築されている。また、写真資料から、階段を上がったすぐ両脇には十三重層塔の石造物が一対と土壇上の縁辺には土塼が構築されていることも判り、調査を行っていく際の手振りとした。

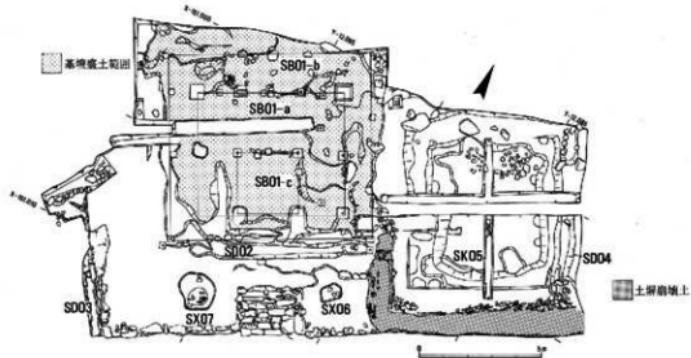
A発掘区内には、表土を除去するとすぐに遺構面になった。発掘区西半分で検出した主な遺構には、施餓鬼堂基壇及び礎石建物（SB01）、土壇痕跡、据え付け穴（SX06・07）、溝（SD02）、石組溝（SD03）等がある。遺構検出面の標高は、土壇上では174.1m、基壇部分では175.1mである。

施餓鬼堂基壇は、奥行が約8.0m、横幅は約9.0mの範囲に基壇築成土が見られ、厚さ約0.3～0.5m分残存していた。築成土は、基本的に3層（第1・3・10層）以上の単位で土壇上に盛土されており、堂宇改築時に伴って順次盛土していくものと思われる。各層から江戸時代の土器類、瓦類が大量に出土した。特に近世の軒瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦の出土が多く、軒瓦には「菩提寺」「觀音堂」と書かれた文字瓦が数点ある。

SB01は石造物を礎石として使っている建物である。礎石に使われた石造物は、基壇上に43箇所にも据えられていたが、同時期に複数の建物が建っていたとは考えにくく、1棟の建物が数回にわたりて建て替えられたものと思われる。第1次調査では明らかにすることはできなかったが、第2次調査で第10層の基壇築成土上面まで掘り下げたところ、据え付け用の穴を7箇所検出することができた。第1・3層の基壇築成



A発掘区（第1次調査）施餓鬼堂全景（北東から）



A発掘区（第1次調査）遺構平面図（1/200）



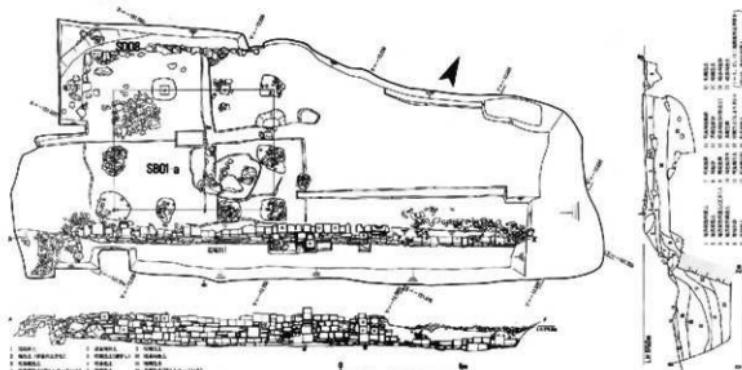
A発掘区第1次調査東半部の様相（北東から）

たと思われる。おそらくこの建物が、昭和初年の写真資料にみえる施餓鬼堂であろう。このように建物は少なくとも3時期以上の変遷が認められるが、石造物を重ねて高さを調整している箇所も見られるので、細部での改築や修繕が行われた可能性も考慮する必要があるだろう。

S D02は、施餓鬼堂基壇の前面で検出した溝で、基壇上面と溝検出面の高低差は概ね0.6mある。雨落ち溝であろうか。発掘区の南西部では、土壌の石垣裾部分で幅約0.3mの石組溝（S D03）を検出した。全様を明らかにすることはできなかったが、土壌の石垣の裾に沿って掘られた排水用の溝であろう。

A発掘区東半分も表土の下がすぐに遺構面となっている。遺構面の標高は約174.3mである。検出した遺構には、土壠、溝（S D04）、土坑（S K05）等がある。土壠は、崩壊土が残るだけであったが、土壇の縁辺部に沿って作られており、施餓鬼堂正面の階段の手前付近でL字状に堂宇の方へ曲がっている。崩壊土中にはおびただしい数の丸瓦や平瓦が見られ、おそらく土壠を構築する際の材料として使用されたのであろう。S D04は、発掘区の端で検出した北西から南東方向に流れる溝である。上塙と重複しており、上塙の下は暗渠になって菩提山川へ排水していたものと思われる。S K05は、長径3.5m以上、短径1.0m以上の不整形の掘形で、検出面からの深さは0.6mある。埋土からは、近世瓦類が多量に出土した。

第2次調査 平成8年度の第1次調査で、施餓鬼堂基壇部分を断ち割った際に、下層に石造物



A発掘区（第2次調査）遺構平面図・石垣立面図（1/200） 基壇及び石垣堆積上層図（1/100）

を転用した石垣が残存していることが判明したため、第2次調査では、下層遺構の検出を主目的として行った。施餓鬼堂基壇築成土は明らかに下層遺構を覆って積み上げられているために、基壇築成土及び下層遺構の覆土を除去することから始めた。その結果、基壇盛土第10層上面でSB01-a期の礎石据え付け痕跡を検出するとともに、基壇北西隅のコーナーを確認することができた。礎石据え付け痕跡は、検出面から約0.1mと浅く、底部には3cm大の小石を敷いていた。基壇北西隅のコーナーは、基壇側に自然石または五輪塔火輪を利用して化粧をしている。基壇の輪郭に沿ってSD08の溝を設け、排水施設をつくっている。下層遺構の調査は、長さ21.2m、幅2.0mの発掘区を設定して行った。土壇上面から約1.2m掘り下げたところで石垣の基底面となり、基底石を含めて5~6段分石造物を積み上げた石垣が18.0m以上も南北方向に続いていることが判明した。さらにB発掘区では、この石垣の東端を検出することができ、A発掘区での成果とあわせると、石垣の全長は概ね27mあることが判った。

石垣は、大半が石造物（五輪塔地輪・火輪、塔婆、箱仏、台座）で構築されているが、石垣の西・東側には自然石を幾つか使用している。確認した石材の数は、石造物が275基、自然石が7である。全体の97.5%を石造物が占めており、特に五輪塔の地輪が圧倒的に多い。基底石には反花のつく台座を多く使用している傾向がある。この他に、阿弥陀仏や地蔵が彫ってあるものや戒名や梵字を刻んだもの等もあり、正面を石垣の表面に向けて構築しているものが多く注目される。また、応永十二年（1402）の年号が刻まれたものが1基ある。

A発掘区の石垣中央付近では、基底面の上に約0.1m程度盛土をし、石造物を4~7段分直立に積み重ねたものが3箇所にあった。何の目的のために構築されたものか不明である。石垣を覆う埋土からは、14~15世紀、17世紀初頭の土器類が若干出土した。

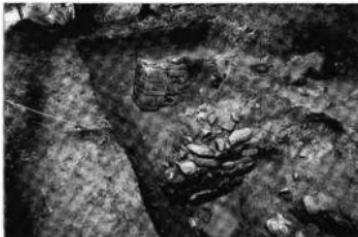
B発掘区では、石垣のコーナーから約1.0m離れた箇所に、この石垣の面に対して南の方向へ約90°曲がるもう1条の石垣を検出した。長さは1.6m分までを確認した。検出面から約1.6m（標高約173.2m）で基底面となる。基底幅は概ね1.2m。自然石と石造物で構築されているが自然石の方が多い。南端が発掘区外へ続くため全様が判らないが、惣門が近くに位置しており、これに接続する扉の下部に組み込まれた可能性が考えられる。この他に、18世紀以降の埋甃遺構がある。重複関係から石垣の方が古い。



石造物を転用した石垣（南西から）



A発掘区（第2次調査）全景（南東から）



B発掘区石垣コーナー部分（東から）

**惣門地区（C発掘区）** 現在も菩提川の右岸には所々に自然石で積まれた石垣が残存しており、施餓鬼堂から普門院にかけても断続的に見られ、惣門の脇あたりで一旦途切れている。この部分に発掘区を設定して、惣門付近の様相を把握することを目的として実施した。表土を除去するとすぐに遺構面となるが、発掘区の南半分と北半分では段差があり、南側の遺構面の標高は174.6m、北側は175.6mである。南側では石組造構、南側では埋甕造構を検出した。

石組造構は、長辺4.6m、短辺2.5mの方形である。掘形はなく、30~40cm程度の自然石を平坦に加工したものを置いているだけで、簡易な建物が構築されていたのであろうか。

埋甕造構は3基検出した。径0.4~0.5mの円形掘形で、検出面からの深さは0.5~0.9mである。上部が欠損しており詳細は不明だが、江戸時代のものと考えられる。甕内には0.4m程の礫や小石が詰められていた。

発掘区の中央部付近で遺構面の段差が認められるが、その部分には小石や0.3m大の礫が密集していた。後世の擾乱を受けたらしく石垣等は残存していないが、これらの礫群は石垣の裏込めに使われたもので、惣門脇にも石垣が構築されていた時期があった可能性が考えられる。

**平場地区（D~G発掘区）** 絵図には施餓鬼堂と普門院の間にも建物が描かれており、おそらくは僧坊等の施設があったものと思われる。これを裏付けるように幾つかの平場が残っている。D・E発掘区は、急斜面の尾根にもかかわらず小さい平場部分が認められたので、遺構の有無を確認するために実施した。D発掘区では、土砂崩れによる堆積が見られるのみであった。E発掘区では、土砂崩れによる堆積も認められたが、小柱穴を検出した。発掘区が狭いこともあり、建物になるかどうかは明らかにできなかった。

F・G発掘区を設定した場所は、調査地の中では一番標高(184.5m)が高い平場である。

F発掘区の層相は、基本的に表土の下に淡褐色土、暗赤褐色と統き地表面から0.3~0.4mで遺構面に達する。検出した遺構には、南北方向の掘立柱列1条、土坑2がある。柱列は、3間分(7.6m)を確認したが北端は発掘区外へ統くため全長は不明である。掘形の一辺が0.8m程度と大きいものが多く、検出面からの深さはどれも約0.3mである。建物としてまとまる可能性もある。

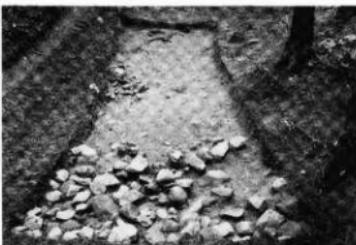
この平場と普門院地区とは約1.0mの段差があり、この上の平場部分にG発掘区を設定した。



C発掘区全景（東から）



D発掘区全景（南から）



E発掘区全景（北から）

ここでは、掘立柱建物1棟、土坑1を検出した。掘立柱建物は、桁行2間(2.2m)、梁行1間(1.5m)の小さい建物である。柱掘形も一辺0.3m程度小さいものが多い。土坑は、この建物の東側で検出した。南北約5.0m、東西約2.0m以上の楕円形の掘形で、検出面からの深さは約0.6mある。東側は、後世の擾乱で壊されたものと見られる。土坑の南西隅に地蔵の正面を普門院側に向けて正位置に据え、そのまわりに0.2m大の礎で根堅めをしたのちに土坑内に土を入れ、地蔵ごと埋めている。埋め戻した土の上には、ばらまいたかのように、小石が散在していた。何等かの祭祀に係るものであろうか。

普門院地区（H～J発掘区） 普門院地区は、今回の調査地の中でも一番広い面積を有する平場である。その一部は、正暦寺参拝者用の第一駐車場として整備されている。普門院地区では、G発掘区のすぐ下の平場（H・I発掘区）と現駐車場と隣接する平場（J発掘区）の様相を把握することを主目的として実施した。

H発掘区内の層相は、表土を取り除くと約0.2mで灰褐色礎の地山に至る。地山面に凸凹がある部分には暗褐色土を入れて整地している。現代の擾乱坑の他には、遺構はなかった。I発掘区の層相は、表土の下に明茶褐色土が堆積し、表土から概ね0.3m～0.5mで黄褐色粘土および灰褐色礎の地山になる。地山上面で柱穴を検出した。検出面からの深さは0.1mほどで、底部には小石が据えられていた。建物の柱穴になるかは不明だが、この付近にも建物等の遺構が残っている可能性は大きいであろう。

J発掘区を設定した平場は、三方を山の斜面で囲まれたような立地である。その斜面の裾の部分には所々に石垣が見られ、調査前から良好な状態で遺構が残存していることが予想された。調査の結果、J発掘区を取り囲むように石垣が残存していることが明らかになり、石組井戸、石組溝（暗渠）、溝、石組造構、土坑、柱穴、埋甕造構等も良好な状態で検出することができた。発掘区内の層相は、厚さ約0.1m程の表土を除去するとすぐに遺構面（標高182.8m）に至った。

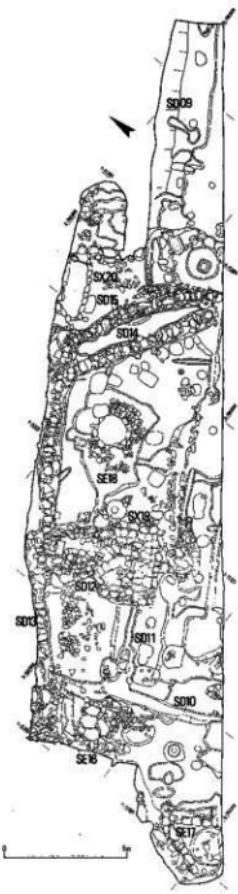
発掘区南西隅で検出した井戸S E16は、自然石で蓋をした状態で残存していた。井戸枠は、内法が直径1.0mの円形の石組である。井戸内部は山からの湧き水が著しく、危険が伴ったので井戸枠内の調査は断念した。深さは、石組枠の上端部から1.3mまでを確認した。S E16の水位がある程度上昇してくると、溝S D10及びS D11に水がつた、それが方形の石組造構S X19へ流れ込み、さらにS X19にある程度水が溜った後に、排水溝S D12を経て石組溝S D13へと流れ込む仕組みになっている。溝S D10は、駐車場側へ下り勾配になっている。石組溝S D13は石垣に沿うようにしてつくられており、石組井戸S E18の北側ではS D14とS D15の二方向の溝に枝分かれをするが基本的に同じ排水施設で、自然石で蓋をして暗渠にしている。S D13は途中で土管の溝と石組の二重構造になっている箇所があるが、土管は石組溝S D14に、S D13の石組溝S



F発掘区東半部の様相（南西から）



G・H発掘区全景（南から）



J 発掘区遺構平面図 (1/200)

今回は、平安時代や鎌倉時代といった正暦寺の初期の遺構を検出することはできなかったが、2カ年にわたる発掘調査では、文献資料や絵地図にも記されていない江戸時代の遺構を数多く検出することができた。特に、石造物を転用した石垣や谷々から湧き出る清水を利用した井戸、導水路、石組遺構、排水路の一連の施設を検出することができたのは貴重な発見であったと言えよう。

**出土遺物** 第1・2次調査をつうじて出土した遺物は、遺物整理箱で451箱分に及ぶ。特に江戸時代の瓦類の出土量が多く注目される。

土器類は、瓦類などの出土量はなかったものの、僧侶達の経済状態や日常生活を知る上で貴重な資料となった。以下に、これらの瓦類・土器類を中心に概要を記す。

(一好美穂)

D15の石組溝につながっている。これらの溝は、東へ下り勾配になっており、SD10同様、普提山川へ排水していたものと思われる。SD09は発掘区の北西部で検出した溝である。検出面からの深さは0.1mと浅い。溝底には淡灰色の細砂が堆積していた。土師器片が少量出土した。

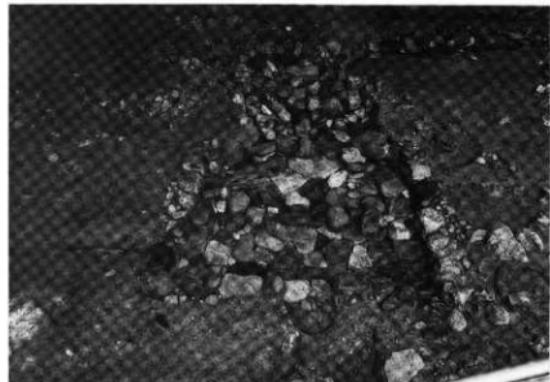
井戸は、SE16の他に2基確認している。SE17は、SE16の南側で検出した井戸で、東西5.0m以上、南北6.5mの方形の掘形を呈し、検出面からの深さは約1.5mである。掘形の肩部には平坦な自然石を敷いている。井戸枠は抜き取られて残存していないかったが、抜取り穴には幾つもの自然石が投げ込まれていたことから石組の井戸枠であったものと思われる。抜取り穴からは大量の近世の瓦類及び土器類が出土した。発掘区の中央で検出した石組井戸SE18は、東西約5.0m、南北3.0mの長方形の掘形を呈し、検出面からの深さ2.7mまでを確認した。井戸枠の内法は径約1.1mある。枠内埋土からは鉄製斧と瓦類が若干出土しただけである。

SX19は、短辺2.6m、長辺3.3mの平面方形の石組遺構である。掘形の底部には人頭大の自然石を平坦に割って敷き詰めている。敷石を掘えた後に掘形の肩部に人頭人の自然石を組んでいる。SX19は少なくとも2時期以上に渡って変遷しているらしく、底部にある程度土が堆積した段階で、SD11から流れてきた水を堰止めるように人頭人の自然石をL字形に置いている。さらに排水施設のSD12の溝内にも人頭人の疊や小石を積め幅を狭めている。SX19の埋土からは近世の瓦類と土器類が出土した。SX19の遺構の性格については、池・洗い場等と考えることもできるが、寺院の性格上から沐浴といった身を清めるような施設を想定することも可能であろう。

SX20は、SD15の北側で検出した石組遺構である。東西3.0m、南北1.1m以上の方形の掘形を呈し、検出面からの深さは0.2mである。掘形の肩部上面に沿って人頭人の自然石を置いている。埋土からは近世の瓦類が若干出土したのみである。



J発掘区全景（南から）



S X19全景（南東から）



石組溝 S D13と土質  
(北東から)

**瓦塊類** 瓦塊類は1次調査で遺物整理箱238箱、2次調査では遺物整理箱186箱で、合計424箱もの大量の瓦類が出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、他に軒丸瓦・軒平瓦・軒棟瓦・面戸瓦・熨斗瓦・鬼瓦・獅子口・雁振瓦・壇がある。大半が整理途中のため、ここでは軒瓦について記す。軒瓦にはすべて数字とアルファベットからなる型式番号を設定した。大文字のアルファベットは範型の違いを示す。なお、型式番号は正暦寺における通し番号として設定したものであるが、空きを設けているため番号は必ずしも連続しない。

軒丸瓦は9型式30種178点が出土した。また他に小片のため型式不明としたものが97点ある。

1型式は「菩提山寺」の文字を配する。A種のみ、15点出土。

2型式は「觀音堂」の文字を配する。A種のみ、4点出土。

10型式は珠紋が小さく、巴の頭部が小さい左巻三巴紋である。A～Cの3種が出土した。A種は巴の頭部がやや尖り気味である。6点出土。B種は巴の頭部が丸い。珠紋数は12である。5点出土。C種は珠紋数が14と、A・B種に比して多い。6点出土。

11型式は珠紋が大きく、巴の頭部が小さい左巻一凹紋である。A種のみ出土した。珠紋数は16である。13点出土。うち1点は瓦当裏面下端に山形の凸帯があり、そこに円棒状工具を用いて、1条の波状紋を描く。

13型式は珠紋が大きく、巴の頭部も大きい左巻三巴紋である。A～Mの13種が出土した。A・B種は巴の尾部が長い。A種の尾部先端は隣の巴の体部と接し、圓線状に見える。A・B種ともに珠紋数は16である。A種は14点、B種は4点出土。C種は珠紋数が15である。23点出土。D種は珠紋数が多く19である。5点出土。E種は珠紋数が18である。8点出土。F種は大型である。珠紋数が14である。巴の部分に明瞭な範傷が確認できる。2点出土。うち1点は鳥食瓦である。G種は1点出土。II種は珠紋数が少なく12である。2点出土。Iは珠紋数が16である。8点出土。Jは珠紋数が16である。2点出土。K種は珠紋数が16である。5点出土。L種は瓦当の直径に比して巴紋が小さい。3点出土。M種は珠紋が16である。4点出土。

20型式は珠紋が小さく、巴の頭部が小さい右巻三巴紋である。A～Dの4種が出土した。A種は巴の尾部が長く圓線状となる。3点出土。B種は1点出土。C種は1点出土。D種はA種に似るが、A種より巴が太い。13点出土。

23型式は珠紋が大きく、巴の頭部も大きい右巻一凹紋である。A～Eの5種が出土。A種は巴が小さく、尾部が長い。珠紋数は13である。13点出土。B種は珠紋数が16である。8点出土。C種は巴の各頭部が違い。1点出土。D種は巴は小さいが各珠紋の径は大きい。珠紋数は13である。1点出土。鳥食瓦である。Eは巴の体部は短いが、尾部は長く隣の巴の体部と接続し、圓線状に見える。1点出土。

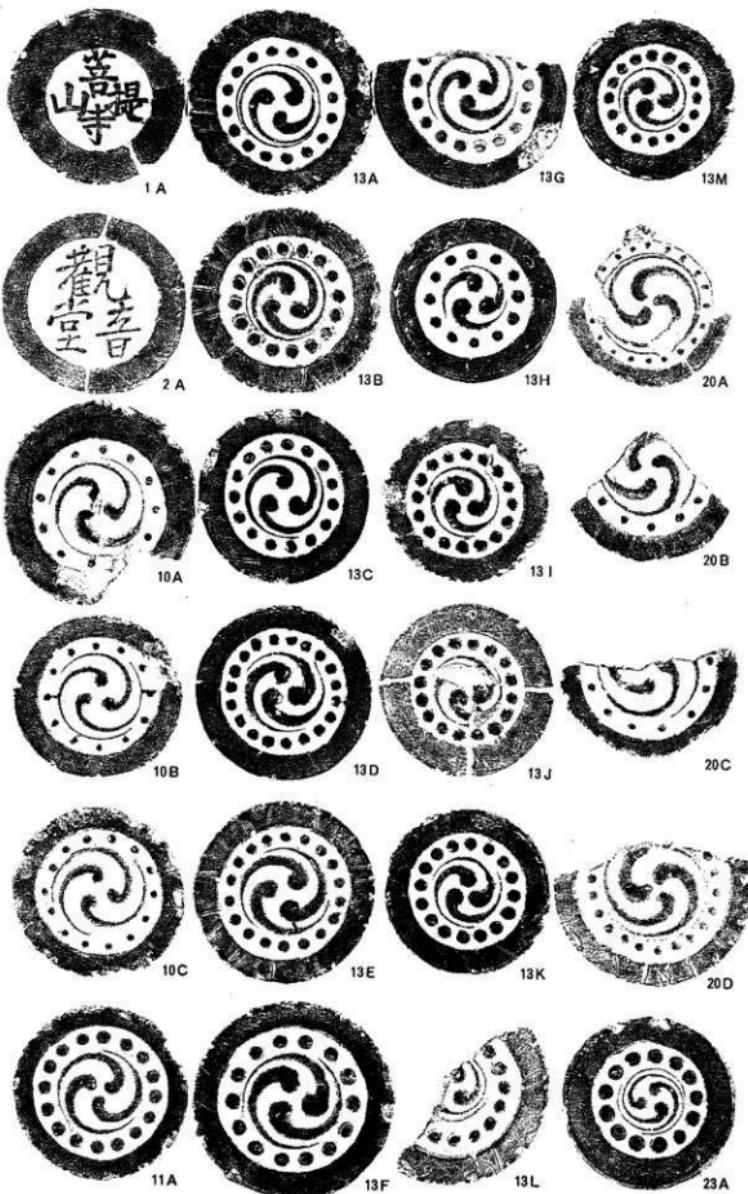
40型式は内区の巴紋と珠紋帶の間に圓線のある右巻一凹紋である。A種のみ、1点出土。

80型式は小型の菊紋である。A種のみ出土した。A種は弁が四弁の8弁である。5点出土。うち小片を除く3点が楕飾り瓦である。

軒平瓦は19型式39種291点が出土した。また他に小片のため型式不明としたものが11点ある。

100型式は左から右に展開する偏右唐草紋である。A種のみ出土した。左側部分の破片のため、紋様構成は左右端から中央に向かって展開する可能性は残る。下の界線はない。2点出土。うち1点は左側面側縁に水返し、凸面に滑り止めが付く。

120型式は上向きの一葉紋を中心飾りとする。A・Bの2種が出土した。A種は4回反転である。17点出土。凹面両側縁に水返し、凸面に滑り止めが付くものがある。郡山城102C型式、半



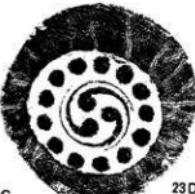
出土軒瓦 1 (1 / 4)



23B



23C



23D



23E



40A



80A



124A



125A



126A



100A



127A



120A



129A



120B



130A



121A



150A



121B



150B



122A



150C



123A

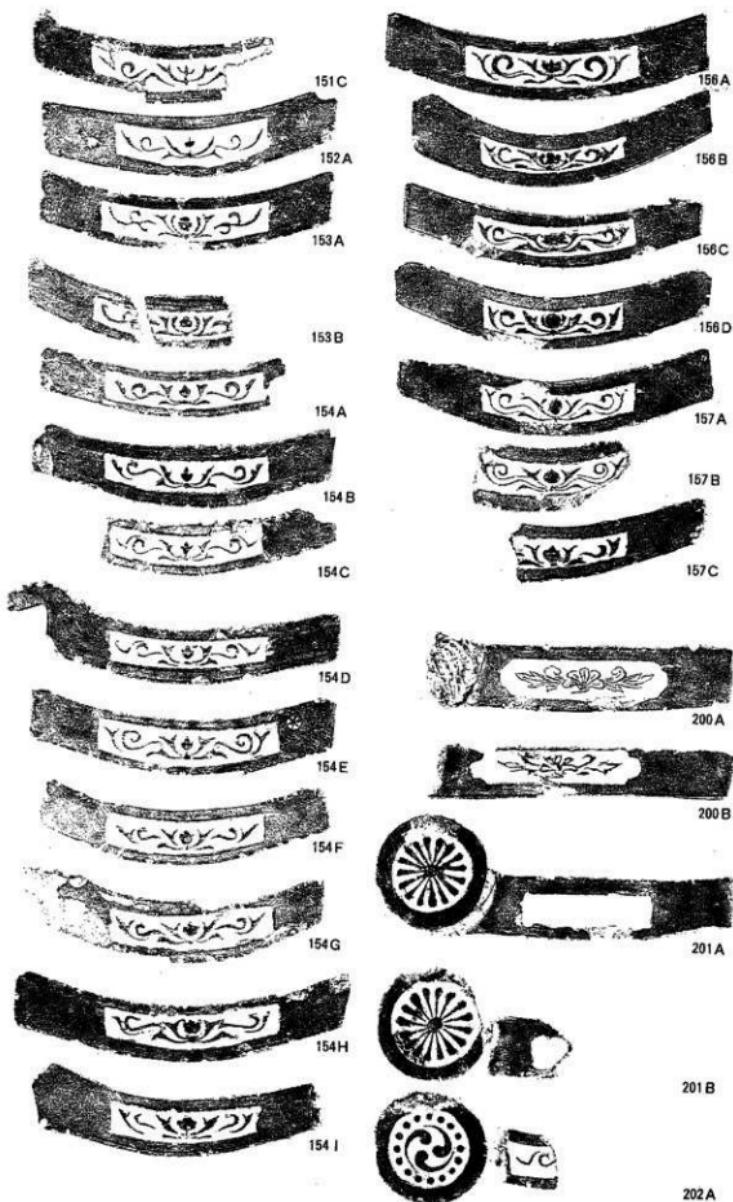


151A



151B

出土軒瓦2 (1/4)



出土軒瓦3 (1/4)

安京押小路殿跡出土例は同範の可能性が高い。B種は5回反転である。左右両端の唐草は外縁に接続する。6点出土。凹面両側縁に水返しが付くものがある。16世紀中頃から17世紀中頃に比定されている法隆寺278A型式、郡山城102B型式、室町時代または16世紀前半と比定されている元興寺例、平安京押小路殿跡出土例は同範の可能性が高い。多聞城軒平瓦<sup>13</sup>型式は同範である。法隆寺・郡山城出土例は左右唐草両端が外縁に接しているのに対し、元興寺・多聞城・平安京押小路殿跡例は接していないことから、すべて同範であれば改範されたものではないかという指摘がされていた。今回、多聞城軒平瓦<sup>13</sup>型式と正暦寺120B型式を実物照合したところ、異範とする根拠はなかった。そのため多聞城軒平瓦<sup>13</sup>型式製作後に、範型の紋様部唐草両端を削除し、紋様幅を縮めたものが正暦寺に供給されたものと考えられる。

121型式は一葉紋を中心飾りとする。左端の唐草は3叉、右端の唐草は2叉である。A・Bの2種が出土した。A種は3回反転である。12点出土。凹面両端側縁に水返しが付くものがある。B種は左側部分の破片であるが、唐草の展開が似るため121型式とした。2点出土。

122型式は120型式と同じく上向きの三葉形を中心飾りとするが、三葉形は第1単位左右唐草に囲まれないものである。A種のみ、2点出土。元興寺例は同範である。

123型式は下部が接続する対向「C」字形を中心飾りとする。A種のみ、1点出土。

124型式は上方へと巻く1対の唐草紋を中心飾りとする。A種のみ、4点出土。室町時代または16世紀後半と比定されている元興寺例は同範の可能性が高い。新薬師寺例は同範である。

125型式は「T」字形を中心飾りとする。A種のみ、5点出土。

126型式は宝珠形を中心飾りとする。A種のみ、1点出土。

127型式は下向きの笛紋を中心飾りとする。A種のみ、1点出土。18世紀初頭から19世紀前半に比定されている法隆寺381C型式、郡山城115A型式は同範の可能性が高い。

128型式は大振りの半截花紋を中心飾りとする。A種のみ、2点出土。

129型式は菱形花弁の下に左右各々菱形の一葉をおく橋紋を表現した中心飾りをもつ。A種のみ、4点出土。なかには左側外縁上に四菱の刻印が押捺されたものがある。元興寺例は同範である。

130型式は3叉の花弁の下、左右に各々2叉の一葉をおく一種の橋紋を表現した中心飾りをもつ。A種のみ、8点出土。凹面側縁に水返しが付くものがある。

150型式は3叉の花弁の下、左右に各々二葉をおく一種の橋紋を表現した中心飾りをもつ。A～Cの3種が出土した。A種は左右両端の唐草が「V」字形である。18世紀初頭から19世紀前半に比定されている法隆寺284E型式と同範の可能性が高い。2点出土。うち1点は2つの軒平瓦の側面を接合した隅棟用軒平瓦である。B種は左右両端の唐草が2叉である。4点出土。C種は左右上方の葉が長い。1点出土。

151型式は3叉の花弁の下、細長い茎があり、そこに左右各々二葉をおく一種の橋紋を表現した中心飾りをもつ。上の二葉は2叉で茎に接続する。A～Cの3種が出土した。A種は左右両端の唐草が2叉である。1点出土。B種は左端唐草が2叉であるが右端は2叉ではない。3点出土。C種はA種に似るが第1単位の唐草が大きい。2点出土。うち1点は瓦当寄り右側面から斜めに半截した隅棟用軒平瓦で、凹面左側縁に水返しが付く。

152型式は珠点の花弁の下、細長い茎があり、そこに左右各々二葉をおく一種の橋紋を表現した中心飾りをもつ。下の二葉は2叉で茎に接続する。A種のみ、9点出土。

153型式は大型の球状花弁で、その下左右に各々三葉をおく一種の橋紋を表現した中心飾りをもつ。A・Bの2種が出土した。A種は花弁が縦にやや長い。2点出土。B種は花弁が横にやや

長く、上方がやや尖る。B種は1点出土。

154型式は3叉の花弁の下、左右に各々二葉をおく橋紋を中心飾りとする。A～Iの9種が出土。A～E種は左右の上の葉が大きく湾曲する。A種は左右第1単位・第2単位の唐草が接続する。3点出土。B種はA種に似るが左右第1単位・第2単位の唐草は接続しない。24点出土。C種は左右両端の唐草が鎌形である。19点出土。D種はC種と同じく左右両端の唐草が鎌形である。花弁の大きさがC種より大きい。15点出土。なかには棟瓦のものもある。正暦寺福寿院客殿解体修理の際に確認された軒平瓦と同様の可能性が高い。元興寺例は同様である。E種は左右第1単位の唐草の巻きが強い。14点出土。外縁上に1箇所、菊花形の刻印が押捺されたものがある。F種とG種はよく似るが、花弁の大きさはF種の方が小さい。F種は19世紀初頭から19世紀後半に比定されている法隆寺284C型式と同様の可能性が高い。F種は52点出土。G種は10点出土。H種は左右両端の唐草が2叉にならない。2点出土。I種は左右第1単位の唐草が上方に向かう。1点出土。

156型式は昆虫の眼球風の花弁の下、左右各々二葉をおく橋紋を中心飾りとする。A～Dの4種が出土した。A種は唐草が最も大きい。10点出土。B種とC種はよく似るが、C種は下の葉が2叉になる。B種は23点出土。なかには棟瓦のものがある。C種は4点出土。D種は花弁が最も大きい。14点出土。左外縁上に「池瓦治」と縦書きした刻印が押捺されたものがある。

157型式は球状の花弁の下、左右各々二葉をおく橋紋を中心飾りとする。A～Cの3種が出土した。A種とB種は唐草が長い。A種の花弁は綾にやや長いが、B種の花弁は横にやや長い。A種は6点出土。右外縁上に「諸負」と右から左に横書きし、その下に「池瓦吉」と縦書きした刻印が押捺されているものがある。B種は1点出土。C種は唐草が短い。1点出土。

軒棧瓦は3型式5種28点が出土した。また他に小片のため型式不明としたものが1点ある。

200型式は軒平瓦部が中心飾り五葉の唐草紋である。丸瓦部が明らかなものはない。AとBの2種が出土した。B種は紋様がA種に比してかなり簡略化されている。A・B種とともにすべて軒平瓦部が平板状の「板解瓦」である。A種は2点、B種は1点出土。

201型式は軒丸瓦部が菊花紋、軒平瓦部が無紋である。AとBの2種が出土した。B種は軒丸瓦部の弁先端がA種に比して幅広い。A・B種とともに「板解瓦」である。A種は20点、B種は4点出土。

202型式は軒丸瓦部が左巻三巴紋で、軒平瓦部が中心飾り橋紋の均整唐草紋である。A種のみ1点出土。軒平瓦部は、軒平瓦154D型式と同様である。軒棧瓦である。  
（原田憲二郎）

註1) 以下、郡山城の型式番号は山川均「郡山城出土の軒瓦について」『鐵農城報第2号』 1995に掲げる。

註2) 松井忠志「平安京跡小堀駿跡第2次調査」『平安京跡研究調査報告第12輯』古代學協會1984の第23図3

註3) 以下、法隆寺の型式番号は佐川正敏か「昭和資料編15法隆寺の至宝 瓦」小学館 1992に掲げる。

註4) 藤澤典彦「中・近世瓦の研究 元興寺篇」実測版9号～18 元興寺文化財研究所 1982および芦田淳一「元興寺極楽坊中世軒平瓦にみる瓦当接合技法の展開」第1回～33「元興寺文化財研究No.67」元興寺文化財研究所 1998

註5) 松井忠志「平安京跡小堀駿跡第2次調査」『平安京跡研究調査報告第12輯』古代學協會1984の第23図1・2

註6) 中井公「IV出土遺物の概要 1 瓦類」『多聞庵城発掘調査概要報告書』奈良市教育委員会1979

註7) 山川均「郡山城出土の軒瓦について」『鐵農城報第2号』 1995

註8) 「元興寺旧境内の調査第14次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』奈良市教育委員会 1988 同様の軒平瓦は未報告。

註9) 藤澤典彦「中・近世瓦の研究 元興寺篇」実測版11～27 元興寺文化財研究所 1982および芦田淳一「元興寺極楽坊中世軒平瓦にみる瓦当接合技法の展開」第1回～33「元興寺文化財研究No.67」元興寺文化財研究所 1998

註10) 「新薦寺跡旧境内の調査第3次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成2年度』奈良市教育委員会 1991 同様の軒平瓦は未報告。

註11) 「元興寺旧境内の調査第7次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和61年年度』奈良市教育委員会 1987 同様の軒平瓦は未報告。

註12) 「重要文化財正暦寺福寿院客殿解体修理工事報告書」奈良県教育委員会 1978

註13) 「元興寺旧境内の調査第35次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成4年度』奈良市教育委員会 1993 同様の軒平瓦は未報告。

註14) 「板解瓦」の用語は坪井利弘『鐵農瓦屋根』理工学社 1977に掲げる。

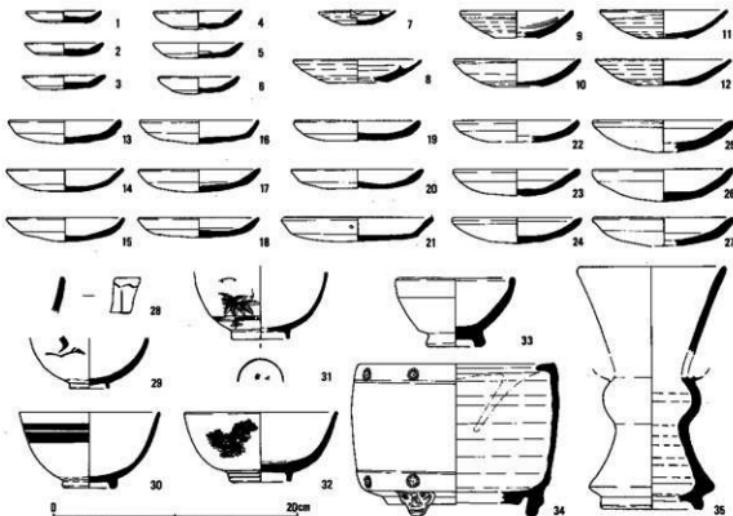
**土器類** 2次にわたる発掘調査で遺物整理箱22箱分の土器類が出土した。土器は主にA発掘区、G発掘区、J発掘区から出土した。A発掘区からは鎌倉・室町時代と江戸時代の遺物が出土した。鎌倉・室町時代の遺物は土師器皿の小片で、石造物を利用した石垣の埋土から一定量出土しており、周辺に同時代の遺構の存在が考えられる。施餓鬼堂基壇やその周辺からは江戸時代の遺物が多く出土した。J発掘区では江戸時代の遺物が出土したが、江戸時代後期の土器にまとまつたものがある。G発掘区からは江戸時代初めの遺物が多く出土した。以下A発掘区施餓鬼堂基壇周辺出土のものと、J発掘区S E17・S X19出土のものについて記す。

A発掘区施餓鬼堂周辺出土上器（1～35） これらは基壇盛土等からの出土である。

1～6・13～27は土師器皿である。胎土の色調は1～5・13～21が橙色系、6・22～27が黄橙色系である。橙色系のものに比べ、黄橙色系ものは器高が深く、やや丸みをもった底部で、器壁はやや厚い。21の口縁部外面には約3mm大の金箔が付着する。7～12・29・30は京・信楽系窯の施釉陶器である。いずれも灰釉を施釉し29・30の碗には鉄釉で紋様を描く。9の灯明皿は内面に横目を1条施す。9～12・30には見込み部にトチンの跡が3つ残る。28は中国龍泉窯系の青磁碗で外面に連弁紋を描く。31・32は肥前系窯の染付碗。32は外面にコンニャク印判の紋様を施し、見込み部の輪を環状に搔き取る。33は瓦質土器碗で炭素があまり吸着せず、灰色の素地が表れている。34・35は肥前系窯の青磁香炉と花瓶である。

28の青磁碗が15・16世紀代、黄橙色系の胎土の土師器皿が17・18世紀代、32の碗が18世紀代、京・信楽系窯の施釉陶器が19世紀代と考えられる。橙色系の土師器皿は同様の胎土のものが19世紀前半にあるが、口径9cmをこえる皿ではなく、19世紀前半を含めそれ以降のものであろうか。

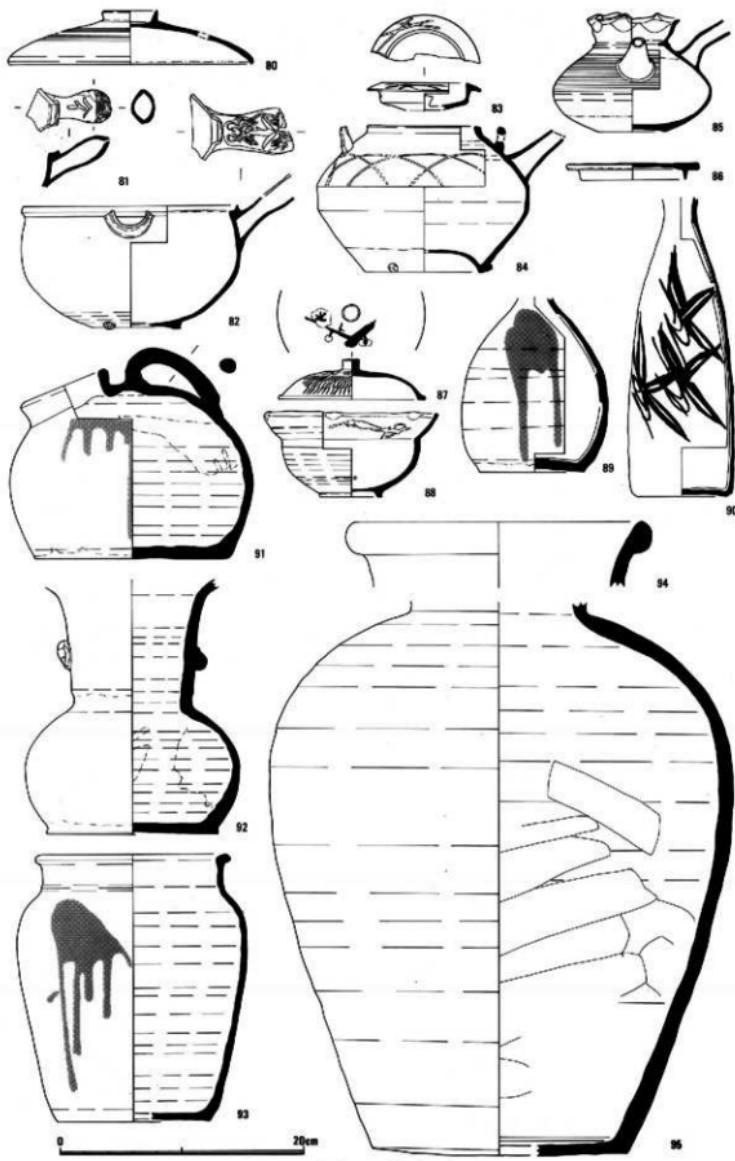
出土位置は1～5・12・15・21・35が基壇直上、11・16・23・28・29が基壇盛土、6・7・13・14・17～20・22・24・27・30・32が基壇盛土1層、9・10・33・34が基壇盛土3層である。



施餓鬼堂基壇出土土器（1／4、21のトーン部分は金箔）



S X19 • 井戸 S E17出土土器 (1 / 4)



S X19・井戸SE17出土土器 (1/4)

J発掘区 S E17・S X19出土土器 (36~95) S E17とS X19は別の造構であるが、土器は接合関係があり、また同じ紋様をもつ肥前系磁器が数点ずつ両者にあることから、ほぼ同時期のものと考えられる。両者の出土土器の内容は表に記しているが、いずれも国産陶磁器が半数以上を占め、なかでも京・信楽系窯の施釉陶器の占める率が高い。

一方S X19はS E17に比べ土師器皿の出土量が多く、造構の性格の差が考えられる。なお図示したものはS E17のものを主とし、土師器皿などをS X19から追加した。S X19出土のものは37~39、42~45、48、62、66で他はS E17出土である。いずれも19世紀前半のものと考えられる。

36~46・53・54は土師器、75~76は瓦質土器、47~52・74~77~95が国産陶器、55~73は国産磁器である。

36~46は土師器の皿でいずれも橙色系の胎土である。口径は6cm代、7cm代、8cm代、10cm代と4種類確認でき、6・7cm代のものが大半を占める。6cm代の36~39は平坦な底部から一気に立ち上がり口縁部になるが、7cm代の41~44はやや丸い底から緩やかに外面上方に立ち上がり口縁部になる。後者に比べ前者は器高がやや低い。また後者は歪みがあり外面の凸凹がやや目立つに対し、前者は外面が比較的平滑で歪みが少なく丁寧な仕上がりである。47~51は京・信楽系窯の施釉陶器の灯明皿である。47・48は内面に櫛目を1条施す。52の軟質施釉陶器皿は土師質の素地に透明釉を掛ける。外面ロクナデで調整し、底部外面には回転糸切り痕跡がある。産地は不明。55~71・73は肥前系窯の碗皿類で56の青磁鉢以外はすべて染付である。65の碗は見込み部の釉を環状に搔き取り、中央にコンニャク印判の五弁花紋を配す。73の皿は外底面にハリ支えの跡と「大國化粧皿」の銘がある。72は瀬戸美濃系窯の染付碗である。75~76の瓦質土器火鉢はいずれも十節質で焼き上がる。74~78は堺窯の描鉢である。77は瀬戸美濃系窯の鉢で外面に灰釉を施釉する。79は信楽窯の描鉢で1単位6本の描り目を見込み部から口縁部まで一気に刻む。80~88・90は京・信楽系窯の施釉陶器でいずれも灰釉系の釉を施釉する。80~82は行平鍋とその蓋で、鍋の把手には「个」・「□」の記号を押しする。48・49は急須とその蓋で急須の肩部と蓋の上面に白泥で紋様を描く。84には耳が2つあり、85には把手が1つある。86~88は鉢とその蓋。87と88はセットで、蓋上面には鉄絵と白泥で梅の木を描き、鉢の口縁部内面にも白泥で紋様を描く。90の徳利は鉄釉で花(?)を3つ描く。89・91~93は信楽窯の蓋類である。いずれも褐釉を厚く施釉し、92を除き他は肩部から黒釉を垂らす。94~95は産地不明の焼締陶器蓋である。

(中島和彦)

S E17出土上器破片数

土師器	皿	17
	壺・塔	2
	不明	2
	小計	21
瓦質土器	火鉢	30
	壺	1
	小計	31
国産磁器	肥前系窯	
	碗	35
	皿	7
	碗・蓋	8
	鉢・蓋	10
	他	2
	瀬戸美濃系窯	
	碗	3
	小計	65
国産陶器		
瀬戸美濃系窯	鉢	2
信楽窯	壺・鉢	62
	壺・蓋	15
京・信楽系窯	碗	6
	灯明皿	9
	壺・蓋	11
	鉢	8
	鉢・蓋	5
	急須・蓋	19
	屋・蓋	18
	他	21
	場・窓	5
	産地不明	33
	小計	228
合計		345 345

S X19出土上器破片数

土師器	皿	156
	鉢	158
瓦質土器	鉢	2
	羽・窓	10
	不明	5
	小計	17
国産磁器	肥前系窯	
	碗	54
	皿	9
	碗・蓋	5
	蓋	2
	小計	70
国産陶器	信楽窯	
	壺・鉢	10
	壺・蓋	5
京・信楽系窯	碗	56
	皿	4
	灯明皿	12
	壺・蓋	12
	鉢・蓋	5
	鍋・鍋蓋	14
	急須・蓋	9
	不明	5
	皿	5
	壺・蓋	15
	小計	152
合計		395 395

**金属製品・石製品** A発掘区から砥石（砂岩）1点、釘3.4kg、大型鎌3点、鉈1点、鎌1点が出土した。J発掘区からは、砥石（砂岩2、頁岩2）4点、釘300g、鎌2点が出土した。釘はいずれも鈎がひどく錆着しており、個体数量は不明である。A発掘区からのものはすべて遺物包含層から、J発掘区の鎌はSE18とSX19から、その他は包含層からの出土である。

**石造物** 施餓鬼堂の礎石や石垣に転用されていたものが合計310基あり、すべて花崗岩である。ここでは、施餓鬼堂の礎石に転用された石造物について概要を記す。

施餓鬼堂の礎石に使われていた石造物の内訳は、五輪塔地輪29基、反花座2基、台座2基、宝篋印塔2基である。このうち梵字が刻まれているものは6基ある。

1は、SB01-a期の建物の北側柱列の一番西に据えられていた台座である。長辺62.0cm、短辺58.5cm、高さ18.0cmである。表裏ともノミの痕跡が著しく表面が凸凹している。

2は、1の東隣で検出した五輪塔地輪である。長辺36.2cm、短辺36.0cm、高さ25.5cm、枘穴径10.5cmである。一箇所にのみ梵字「瓦」が刻まれている。

3は2の東隣で検出した反花の付いた台座である。反花は複弁4連である。寸法は、上面は35.5cm四方、下面は長辺49.0cm、短辺48.8cm、高さは16.0cmである。上・下面に係わらず粗いノミ痕跡が残る。

4は、3の下に置かれていた五輪塔地輪である。短辺36.2cm、長辺36.2cm、高さ25.5cm、枘穴径10.5cm。正面に戒名「春乃房」と梵字「瓦」、年号「永禄七年二月□日」が刻まれている。底面は、粗いノミ痕が残っている。

5は、3から2つ目の上に据えられていた五輪塔地輪である。寸法は、縦・横共に28.5cm、高さは21.5cm、枘穴径7.0cm。正面には戒名と梵字が、残りの三面には梵字だけが刻まれている。戒名は「永禪房」で、梵字は「瓦」である。年号は「壬辰五月十三日」と読める。正面に対して、その裏側（5-1）は「瓦」、左側は（5-3）「瓦」、右側（5-4）には「瓦」の梵字が刻まれている。

6は、SB01-b期の建物の東側柱列の北から2番目に据えられていた宝篋印塔の笠である。上段の寸法は長辺17.3cm、短辺17.0cm、中段は22.8cm四方、下段は長辺26.3cm、短辺26.0cmである。正面に年号「天正六年」、戒名「春覺房」、最後に「□□七月□□」と刻む。

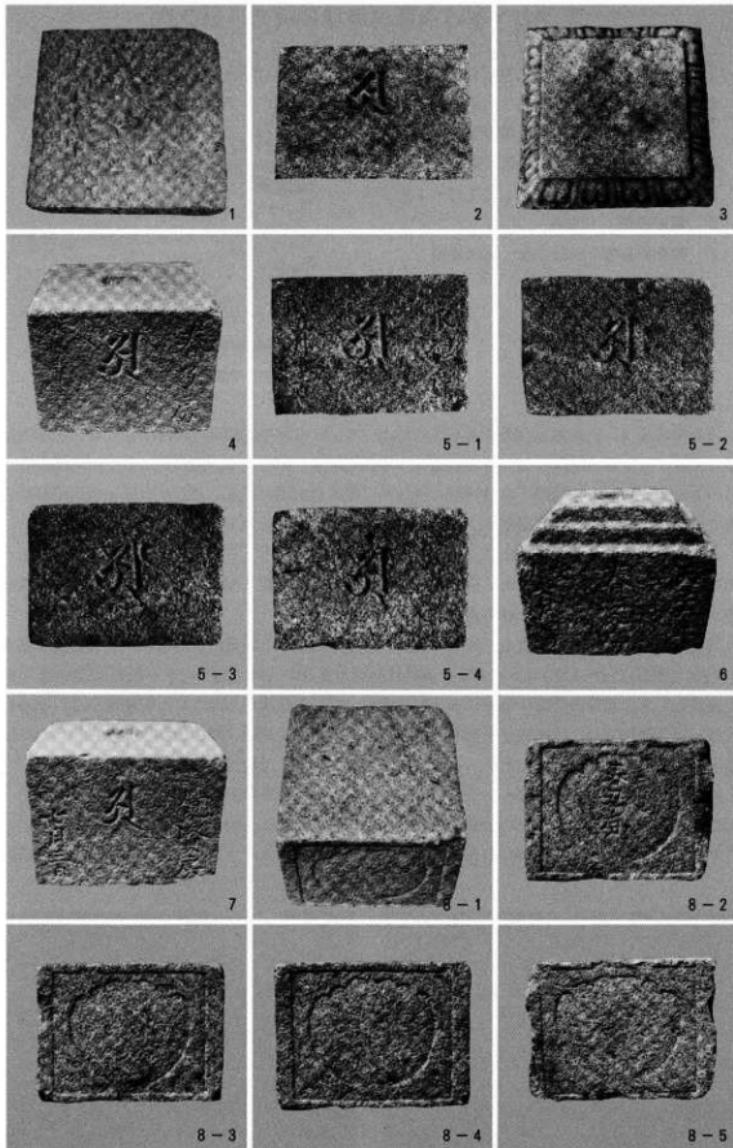
7は、SB01-a期の建物南東隅の礎石から斜め西側に据えられていた五輪塔地輪である。寸法は、長辺26.0cm、短辺25.3cm、高さ19.0cm、枘穴径6.8cmである。正面に戒名「覺賢房」、梵字「瓦」、年号「□□七月三日」と刻んでいる。

8は、SB01-c期の建物の東側柱列の北から2番目に据えられていた宝篋印塔基台である。寸法は、長辺26.5cm、短辺26.3cm、高さ20.3cmである。四面には格狭間様のレリーフが刻まれ、正面には「春丑房」の戒名が刻まれている。

以上、施餓鬼堂の礎石に使用された石造物についてみてきた。表面の風化のため不明瞭なものもあるが、多くは判読することができた。「永禄七年」（1564）と「天正六年」（1578）と年号が刻まれたものがあり、施餓鬼堂が建立された時期の手がかりになるであろう。

城郭遺跡で石垣や階段の一部に石造物が使われている例はあるが、石垣の全面に石造物が使用されていた報告例はなく、ここが仏教寺院の境内であることの意味も含めて、重要な発見であるといえる。また、石垣に使われた地輪の数に対して、五輪塔の他の部位が寺域内全体においても殆ど見つかっていないことも注意を払う必要があろう。他地域から地輪だけを運んできたのか、それとも他の部位はよそへ投棄されたか、まだ発見されていないだけなのか。幾つか理由が考えられるが、残念ながら今回の調査だけでは明確にすることはできなかった。

（三好美穂）



施設鬼堂の礎石に転用された石造物

## 2 七ツ塚古墳群隣接地の調査 第2次

- 1 事業名 市道南部第478号線改良工事  
2 届出者名 奈良市長 大川靖則  
3 調査次数 七ツ塚古墳群第2次調査  
4 所在地 奈良市山町1029他  
5 調査期間 平成11年1月4日～1月8日  
6 調査面積 20m<sup>2</sup>  
7 調査担当者 三好美穂・原田香織



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地周辺は、大和高原西縁にある谷のひとつで、この谷の北側の丘陵南斜面には、円照寺墓山古墳群、五ツ塚古墳群、七ツ塚古墳群などの古墳が多く存在する。調査地は七ツ塚古墳群と、この谷の上方にある古墳群との空閑地に当たり、現状は水田である。ここには既知の古墳はないものの、周辺の古墳に伴う遺構や、未発見の古墳の有無を確認するために調査を実施した。

発掘区は、丘陵南斜面の際に沿って、水田の横にある平場と、そこから一段上の水田との2カ所に設定した。いずれも幅1m、長さ10mである。このうち第1発掘区は、中央に工事用の造り方が設定されていたため、これを避けて2つに分けた。

第1発掘区は、表土（腐食土）直下で、かなり堅く締まった淡黄色砂質シルトと黄褐色礫土の地山（標高122.0～122.1m）となる。遺構は検出できなかった。表土内から須恵器壺の破片が1点出土した。遺物の詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構から混入した可能性が高いと思われる。第2発掘区は、作土直下で青灰色礫土と淡青灰色砂の地山（標高123.0～123.1m）となる。近年の水田に伴う溝を検出したが、それ以前の遺構及び出土遺物はなかった。

いずれの発掘区でも斜面際ということもあり、表土以外の堆積層もないことから、遺構があったとしても、その大半が開墾時に削平されたものと考えられる。今回の調査は小規模なものであったが、今後、広範囲な調査が行われれば、残存する遺構を検出できる可能性がある。（原田香織）



第1発掘区全景（南東から）



第2発掘区全景（南東から）

## IV 小規模確認調査・試掘調査・工事立会

# 1 小規模確認調査・試掘調査

本年度は、奈良県教育委員会の指導のもと、25件の小規模な確認調査と試掘調査を実施した。その結果、良好な構造が発見された場合には、本調査の実施を届出者と協議した。なお、調査記録と出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

98-01次(H10.03.16～H10.05.15)	史料大寺町境内	大安寺一丁目	L=285.3m	奈良市役所／公共下水道施設工事	H09.1075
【調査結果】現状：道路 調査検出手前：黄灰色砂利(地山)上面一現場地表面から-1.2m 検出遺構：裾衣鉢切石層上築基壇、円形埴輪/丹戸 【備考】一部柱頭変更後、工事着手。監査120頁に記載。					
98-02次(H10.04.08)	平城京左京五角二坊一坪	前木町65-1	16m <sup>2</sup>	人西善香／倉庫建設	H09.3265
【調査結果】現状：瓦礫地 調査検出手前：黄色粘土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高58.1m 検出遺構：柱穴(奈良時代)、溝(時期不明) 【備考】工事の掘削は造構面まで及ばない。工事着手。					
98-03次(H10.04.22)	平城京左京五角二坊十六坪	西条大路二丁目709-4	13.8m <sup>2</sup>	永尾尚義／駐車場造成	H09.3272
【調査結果】現状：水田 調査検出手前：赤褐色粘土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高58.3m 検出遺構：溝(時期不明) 【備考】工事の掘削は造構面まで及ばない。工事着手。(一部工事先行)。					
98-04次(H10.04.30)	半城町左京五角一切内御理	大安寺二丁目20-1、6-1	25m <sup>2</sup>	大西庄司／共同住宅新築	H09.3318
【調査結果】現状：花地 調査検出手前：灰黑色粘土、黄灰色土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高73.7m 検出遺構：十・十四坪井跡(奈良時代)、土坑、墓(時期不明) 【備考】工事の掘削は造構面まで及ばない。T字手番。					
98-05次(H10.05.01)	平城京左京六条一坊十六坪、東二坊入路	椿木町468-1、469-1他	25m <sup>2</sup>	小見麗次／店舗新築	H10.3019
【調査結果】現状：被築地 調査検出手前：淡灰色沙(第1坊大路西側壁)上面一標高56.8m 検出遺構：第1坊大路西側壁(奈良時代) 【備考】地下遺構に影響を与えない基礎構造に計画変更し、工事着手。(一部工事先行)。					
98-06次(H10.05.13)	崇福寺町境内・西二坊入路	西ノ京町107-1	9m <sup>2</sup>	やまたけ不動産流通／分譲住宅新築	H09.3262
【調査結果】現状：宅地 調査検出手前：黄灰色粘土(地山)上面一標高65.3m 検出遺構：なし 【備考】工事の掘削は造構面まで及ばない。工事着手。					
98-07次(H10.05.22)	半城町右京一條北辺二坊六坪	山陰町109-3、110-9他	12m <sup>2</sup>	(株)ユニチカ／共同住宅新築	H09.3311
【調査結果】現状：瓦地 調査検出手前：灰色砂(田河川)上面一標高72.0～73.0m 検出遺構：なし 【備考】工事の掘削は田河川護岸土中にささり。工事着手。					
98-08次(H10.06.11)	西六条町内・西四坊大路	西大寺御池町727-1、727-3他	30m <sup>2</sup>	(株)あかね住宅／宅地造成	H10.3011
【調査結果】現状：水田 調査検出手前：淡灰色沙(谷理7号)上面一標高55.0m 検出遺構：なし 【備考】工事の掘削は谷理7号上にある。工事着手。					
98-09次(H10.07.01)	平城京左京四条一坊十三・十四坪井接小塙	西条大路二丁目24-1、34-3・26m <sup>2</sup> 他		(株)日本中央住販／宅地造成	H10.3085
【調査結果】現状：水田 調査検出手前：灰黑色粘土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高59.2m 検出遺構：溝・柱穴(奈良時代)、溝(發生時代) 【備考】地下遺構に影響を与えない基礎構造に計画変更し、工事着手。					
98-10次(H10.07.08)	平城京左京三条一坊六坪、東二坊間路	三条大路二丁目629-1	33m <sup>2</sup>	木村亮／アゼル新築	H10.3085
【調査結果】現状：水田 調査検出手前：灰黑色粘土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高62.0m 検出遺構：東一坊訪問路西側倒壊、暗窓(奈良時代) 【備考】地下遺構に影響を与えない基礎構造に計画変更し、工事着手。					
98-11次(H10.07.29)	平城京四条三条間路	四条大路二丁目1008-6、909	28m <sup>2</sup>	木村和臣／宅地造成・共同住宅新築	H10.3020
【調査結果】現状：水田 調査検出手前：灰黑色粘土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高60.3m 検出遺構：四条三条間路北・南側露(奈良時代) 【備考】隔壁T字の掘削は造構面まで及ぶが、他の工事の掘削は造構面まで及ばない。T字手番。					
98-12次(H10.08.12～08.14)	赤穂穴穴跡跡	西大寺赤町一丁目958-1他	62m <sup>2</sup>	(社)秋葉会／特別養護老人ホーム新築	H10.3057
【調査結果】現状：瓦礫地 調査検出手前：灰黑色粘土(地山)上面一標高87.8～90.2m 施工遺構：なし 【備考】工事の掘削は地盤上に及ぶが、工事着手。					
98-13次(H11.09.01)	半城町右京四条二坊一坪	西大寺二丁目972-1	27m <sup>2</sup>	藤村昌弘／瓦山伴宅新築	H11.3082
【調査結果】現状：宅地 調査検出手前：灰黑色粘土(地山)。奈良時代(造構面)上面一標高61.4m 検出遺構：土坑(時期不明) 【備考】地下遺構に影響を与えない基礎構造に計画変更し、工事着手。					
98-14次(H10.09.05)	半城町右京四条二坊二坪	西条大路五丁目152-1	16m <sup>2</sup>	(株)杉本尚事／店舗新築	H11.3053
【調査結果】現状：宅地・木・垣根・柱・茅葺 調査検出手前：灰黑色砂(地山)上面一標高64.7m 検出遺構：土坑・溝(時期不明) 【備考】古墳跡跡は円筒地盤であることが判明したため、T字手番。					
98-15次(H10.09.09～09.11)	古墳跡跡	富雄川西一丁目118-3他	52m <sup>2</sup>	(株)近畿不動産／宅地造成	H09.3020
【調査結果】現状：宅地・木・垣根・柱・茅葺 調査検出手前：灰黑色砂(地山)上面一標高105.5m 検出遺構：なし 【備考】古墳跡跡は円筒地盤であることが判明したため、T字手番。					
98-16次(H11.01.10)	新羅寺町境内	高畠町1358-1	2.5m <sup>2</sup>	右沢把佐／建物増築	H10.3132
【調査結果】現状：宅地・宅地 調査検出手前：灰黑色粘土(地山)上面一標高131.8m 検出遺構：土坑・溝(時期不明) 【備考】工事の掘削は造構面まで及ばない。工事着手。					

98-17次(H10.11.26)	平城京左三条五四切坪	大宮町一丁目58-3他	16af	吉田久枝/店舗新築	H10.3144
【調査結果】現状: 宅地 造構造山面: 黄色粘土(地山)、奈良時代(造構造) -標高42.0m 発出構造: 上筑・溝(時期不明)					
【備考】地下構造に影響を与えない基礎構造に計画変更し、工事着手。					
98-18次(H11.12.01~12.18)	糸跡	邑智町182他	65af	(株)人和丸屋商店/ヨルフ商店	H10.3063
【調査結果】現状: 水田・畑地・山林 備考後出面: 黄灰色砂質土(地山)上面-標高35~310m 発出構造: 沢窓(近現代)					
【備考】記録保存後、工事着手。					
98-19次(H11.12.16)	赤坂種穴野	西大寺赤坂町一丁目556-1他	48af	医療法人平和会/精神障害者生活訓練施設新築	H10.3161
【調査結果】現状: 宅地 造構造出面: 黄色粘土(地山)上面-現地表面から-0.4m 発出構造: なし					
【備考】工事の脚筋は地山まで及ぶが、工事着手。					
98-20次(H11.01.19)	平城京東遊歩道	大安町一丁目1204-1	80af	(株)高良トヨベット/店舗新築	H10.3170
【調査結果】現状: 宅地 造構造出面: 黄灰色粘土(地山)上面-標高46.7m 発出構造: 溝(時期不明)					
【備考】記録保存後、工事着手。					
98-21次(H11.02.03)	赤坂種穴野	西大寺赤坂町 丁目556-1他	100af	医療法人平和会/精神障害者生活訓練施設新築	H10.3181
【調査結果】現状: 宅地 流れ地出面: 淡灰色土(地山)上面-現地表面から-0.5m 発出構造: なし					
【備考】T字の掘削は地山前面まで及ぶが、工事着手。					
98-22次(H11.02.09)	平城京左水二条四切十二・十	芝町三丁目100-1 二坪堀23-9	50af	東口サキ/共同住宅新築	H09.3073
【調査結果】現状: 宅地 造構造出面: 黄灰色粘土(地山)上面-現地表面から-1.3m 発出構造: なし					
【備考】工事の脚筋は旧河堤壁に中止する。工事着手。					
98-23次(H11.03.02)	平城京西四条大路	尼辻町字四四四番7-1他	168af	(株)シマモト商店/医療施設	H10.3188
【調査結果】現状: 有志駐車場 造構造出面: 黄灰色粘土(地山)、奈良時代(造構造) 上面-標高58.0m 繊山造橋: 四条大路南側清(奈良時代)					
【備考】工事の脚筋は繊橋頭まで及ばない。工事着手。					
98-24次(H10.03.23)	秋篠山隧道	秋篠町117-1	25af	赤坂秀喜/店舗新築	H10.3273
【調査結果】現状: 水田 造構造出面: 淡灰色粘土(地山)上面-標高76.9m 発出構造: 溝・土坑(中止?)					
【備考】記録保存後、工事着手。					
98-25次(H10.05.30)	宝来城跡	宝来四丁目504-2	12af	(株)サカタ建設工業所/併用 住居新築	H10.3292
【調査結果】現状: 荒地帯 造構造出面: 淡灰色粘土(地山)上面 標高100.3m 発出構造: 溝(時期不明)					
【備考】記録保存後、工事着手。					

\* 上欄左から調査次数・調査日/遺跡名/調査地/調査面積/事業者・事業内容・書類交付番号

## 2 工事立会一覧

提出を受けた埋蔵文化財発掘届出者および、現状変更許可申請書に基づき、文化庁・奈良県教育委員会から、奈良市教育委員会が土木工事の際に立ち会うようにと指示されたもののうち、平成10年度に立会調査を実施したものは、下の表のとおりである。

### ●57条2・3 (周知の埋蔵文化財包蔵地内、届出・通知)

番号	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	墨出番号	書名
1	04.02	紀寺跡	紀寺町767-1	森田利剛	個人住宅建設	H9.3276	工事先行
2	04.03	石室六条西坊十三坪	六条西三丁目1335-12	鷹島啓、恵子	個人住宅建設	H9.3295	現GL-0.3m掘削、底土内
3	04.07	左京七条坊十一坪	八条一丁目820-1他	山村馨	個人住宅新築	H9.3275	現GL-0.3m掘削、作土内
4	04.10	右京五条坊六坪	平松四丁目369-9	向瀬二貞	個人住宅新築	H9.3268	現GL-0.4m掘削、地山・雨漏部、造構・遺物なし
5	04.14	西隆寺町内	西大寺東町一丁目40-10	紀伊藤巳	共同住宅新築	H9.3293	現GL-0.5m掘削、底土内
6	04.15	左京三条五坊十五坪	油坂町宇蓮寺町363-3他	(株)蓮長寺	便所・廻縁改修	H9.3226	現GL-0.6m掘削、地山・雨漏部、造構・遺物なし
7	04.15	左京一条七坊十四坪	丁原町23-1の一部	花卉路部	個人住宅建設	H9.3271	現GL-0.5m掘削、底土内
8	04.16	元興寺旧境内	南市町2-2	南根一郎	集合新築	H9.3306	現GL-0.4m掘削、底土内
9	04.16	右京二条坊十四坪	二条町三丁目136-2	豊根保険振興事業組	賃貸新築	H9.3014	現GL-0.6mの作土までは電線、その下は確認不可能
10	04.17	右京二条坊十四坪	寶源町字蘿1号297-1	古松裕子	共同住宅新築	H9.3297	現GL-0.1m掘削、底土内
11	04.20	右京五条三坊四坪	元町二丁目905-7、905-8	萬出公司	個人住宅新築	H9.3244	現GL-0.4m掘削、底土内
12	04.21	東三坊坊間路	赤坂寺町1297-1他	山岡寛光	個人住宅新築	H9.3094	現GL-1.5m掘削、地山・雨漏部、造構・遺物なし

番号	調査日	達跡名	調査地	届出者	工事内容	届出番号	備考	
13	04.31	西京三条二坊八坪	西寺町四丁目2486-1他	井上蔵三、堺	個人住宅新築	H19.3316	工事先行	
14	04.23	西京大路	人森町299-2	木村智一	組合所建設	H19.3195	現GL -0.3m削削、盛土内	
15	04.23	左京二条二坊七八坪御宿小屋	法華寺町1277-1	川崎健治郎	共同住宅建設	H19.2296	現GL -0.4m削削、作土内	
16	04.24	紀伊野跡	紀伊町558-3	太村敏男、非津子	個人住宅新築	H19.3119	現GL -0.9m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
17	04.24	右京三条二坊十六坪	西寺町圓覺寺二丁目385-1	田路野吉也、伴也	個人住宅新築	H19.3287	現GL -0.4m削削、盛土内	
18	04.26	森本一條ノ庄跡	森之庄町字三反田4-1他	坂田達雄	倉庫新築	H19.3312	現GL -0.4m削削、運物合図内、土器出土	
19	05.05	東五坊大路	法華寺町983-2	内川裕二	個人住宅新築	H19.3307	現GL -1.0m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
20	05.06	左京二条五坊十四坪	北野町80-14	1477-1テスカーラ	個人住宅新築	H19.3023	現GL -0.1m削削、盛土内	
21	05.05	左京二条二坊四坪	三条大路二丁目8-17	井井實	個人住宅新築	H19.3331	現GL -0.8m削削、盛土内	
22	05.07	右京五条三坊十坪	平松二丁目264-58	山原秋次郎	個人住宅建設	H19.3305	現GL -1.1m削削、盛土内	
23	05.08	左京三条二丁三明治橋	三条町482-1	北浦孝一郎	店舗建設	H19.3304	現GL -0.5m削削、盛土内	
24	05.08	右京二条二坊一坪	二条町三丁目135-2	黒島保福寺社奉事	温泉グリーン	H19.3014	現GL -0.6m削削、盛土内	
25	05.11	左京三条六十九坪御宿	大谷町一丁目29-3	上田嘉重	個人住宅新築	H10.2915	現GL -0.1m削削、盛土内	
26	05.15	三条大路	猪木町6	畠田大典	組合住宅新築	H10.3320	現GL -1.25m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
27	05.15	南三坊訪問路	法華寺東町1267-2他	松本浩史	共同住宅新築	H19.3311	現GL -0.65m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
28	05.19	西入戸旧施内	西寺大寺新53-41	高橋季季	共同住宅新築	H19.3317	現GL -1.0m削削、運物合図内	
29	05.19	右京三条三坊八坪	菅原153、155	佐古藏三	個人住宅新築	H10.2931	工事先行	
30	05.20	備西町内道敷石敷地	藤原町265-1	(株)古木工務店	宅地開発施設	H10.2027	現削工事終了	
31	05.20	左京西三条二坊七坪	紀伊町565-5	東山機一	店舗付住宅新築	H10.3388	工事先行	
32	05.20	右京五条一坊十六坪	五条町字四條210-1	三上智子	個人住宅新築	H10.3305	現GL -2.0m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
33	05.21	左京五条三坊十坪	必の庭二丁目210-126	藤島通行	個人住宅新築	H19.3315	現GL -0.7m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
34	05.21	右京三条三坊一坪	七条二丁目73-2他	井岡邦男	個人住宅新築	H19.3291	現GL -0.3m削削、盛土内	
35	05.25	右京一条北沢二坊一坪	西寺大寺町一丁目118-6	入江紀夫	個人住宅新築	H10.3300	現GL -0.4m削削、盛土内	
36	05.36	朱雀大路跡	三条大路三丁目444-1他	古田まさき	店舗新築	H19.3304	現GL -0.4m~2.0m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし、史跡調査実施（第405次）	
37	05.26 ～ 06.09	正觀寺跡境内	青松山町地内	京良市長	公共下水道新設	H19.3282	現GL -0.4m~2.0m削削、堆山面確認、石垣（時期不明）検出、土器片出土	
38	05.27	紀伊野跡	丹波守町22-2、33-3	土谷利久	川端住宅新築	H10.3000	現GL -0.4m削削、盛土内	
39	05.29	左京一条七坊一坪	川上町八反筋879-1	秋田貞治	個人住宅新築	H19.3283	現GL -1.5m削削、堆山確認できず	
40	05.28	西一坊大路	二条町三丁目90-31	阪本萬	個人住宅新築	H19.3305	現GL -0.4m削削、盛土内	
41	05.08	左京四条一坊十二坪	四条大路二丁目823-1	米澤恭夫	共同住宅新築	H19.3294	現GL -1.1m削削、作土内	
42	05.10	右京西三条一坊一坪	宝来一丁目地内	奈良市長	公共下水道新設	H19.3269	現GL -1.7m削削、堆山面確認、垂仁天皇被周護（古墳時代）検出、遺構なし	
43	05.11	左京四条一坊七坪	四条大路三丁目970-1	(有)宝住建	独立住宅新築	H10.3023	現GL -0.5m削削、盛土内	
44	06.11	左京五条六段六坪	左近跡	西水辺町八軒町205	柴田博夫	個人住宅新築	H19.3306	工事先行
45	06.11	左京四条一坊七坪	四条大路三丁目970-1	林利康	個人住宅新築	H19.3274	現GL -0.5m削削、盛土内	
46	06.16	麗西寺跡境内	西の京町407-1	中谷義代	個人住宅新築	H10.3013	工事先行	
47	06.18	秋葉町遺物散布地	秋葉町33-1	早瀬茂	寶物點忌事業 施設新築	H10.3024	現GL -0.7m削削、堆山面確認、土坑（時期不詳）検出、遺物なし	
48	06.22	右京一条二坊一坪	佐紀町字4-114-13	尾崎仁博、朱美	個人住宅新築	H10.3286	現GL -0.6m削削、遺物合図内	
49	06.25	左京五条十五坪御宿	法蓮町字池内5986-104	安保榮宏	個人住宅新築	H10.3010	現GL -1.0m削削、河原通内	
50	07.02	吉市城跡	吉市町2374-3	上間義夫、中谷清一	共同住宅新築	H19.3280	現GL -0.7m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
51	07.02	左京二条五丁目御宿	京東三丁目12-40	松田樹人	個人住宅新築	H10.3022	現GL -0.5m削削、盛土内	
52	07.03	右京二条三坊九坪	西寺大寺町一丁目2102-1	黒木森記	個人住宅新築	H10.3023	現GL -0.35m削削、盛土内	
53	07.06	左京二条七十三坪	押上町56-1、56-4他	山本明子	共同住宅新築	H10.3056	工事先行	
54	07.07	五条大路	大安寺六丁目908-1	武野ミツエ	駅車場造成	H10.3036	T工事先行	
55	07.07	左京四条六坊三坪	杉ヶ町87-1	(株)新日本輸送	駅周辺住宅新築	H19.3225	現GL -2.1m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
56	07.07	左京一条五丁目御宿	法蓮町字池内5944-1	川口伸大	共同住宅新築	H10.3055	現GL -0.2m削削、作土内	
57	07.07	左京一条三坊七坪	法華寺町533-4他	大庭寛	個人住宅新築	H10.3044	現GL -0.2m削削、盛土内	
58	07.14	左京三条二坊十一坪	三条大路二丁目845-6他	村岡盛司	個人住宅新築	H10.3041	現GL -0.3m削削、盛土内	
59	07.15	朱雀大路跡	三条大路三丁目444-6	(株)牛場の店	店舗新築	H10.3045	現GL -0.9m削削、堆山面確認、遺構・遺物なし	
60	07.16	左京五条一帯御宿	東木立町53-1	淮田芳彦	個人住宅新築	H10.3044	現GL -0.3m削削、盛土内	

番号	調査日	道 路 名	調査地	届 出 者	工事内容	確認番号	備 考
61	07.23	仙台七条二三井跡小畠	前町地区内	浜川市長	河川改修	H9.3064	現GL~3.4m掘削、堤河辺内
62	07.24	左京四条六坊十坪	東城戸町39	今久保弘	個人住宅建設	H10.3061	丁寧先行、現GL~0.7から0.9m掘削、盛土内
63	07.25	右京一ノ坂北辺三坊八坪	西大寺寺町一丁目59-1	大政役	共同住宅建設	H10.3055	現GL~0.1m掘削、盛土内
64	07.26	坂ノ上七十二町御所筋	南平野町18-2	杉本謙三	個人住宅建設	H10.3077	現GL~0.7m掘削、盛土内
65	07.26	東山坊大路	芝社町一丁目7-7	加賀原謙	個人住宅建設	H10.3074	現GL~0.3m掘削、盛土内
66	07.26	南紀寺大路	高畠町96-3、97-3	古木純一、明美	個人住宅建設	H10.3049	丁寧先行
67	07.26	広大寺造鐵道	今泉町274-2、230-2	西浜信也	個人住宅建設	H9.3310	現GL~0.1m掘削、地山確認、造機・遺物なし
68	07.26	鶴見町二十三町御所筋	六条二丁目108-4	入室喜美	共同住宅建設	H10.3073	T字前行
69	07.26	左京四条二坊十一坪	四条大通一丁目462-23	新瀬義典、新代	個人住宅建設	H10.3051	現GL~0.8m掘削、盛土内
70	08.03	右京六条二十一町御所筋	大安寺町二丁目5-1	人西庄司	仓库建設	H10.3067	現GL~0.6m掘削、作土内
71	08.03	左京五条八坊十七町御所筋	小川町5-2	(株) 小山	個人住宅建設	H10.3102	現GL~0.5m掘削、盛土内
72	08.06	西二坊大路	七条町宇治南147-2、186-4	余良市水道事業管理課 配水管改設	配水管改設	H10.3085	現GL~1.8m掘削、既存管撤去内
73	08.10	左京五条二坊十坪	のり二丁目210-12	大澤和雄、あやの 個人住宅建設	個人住宅建設	H10.3069	現GL~0.3m掘削、盛土内
74	08.10	西二坊大路	七条町宇治南	大澤山田建築部 上永井新設	上永井新設	H10.3086	現GL~1.4m掘削、作土内
75	08.11	左京二条二坊五坪	芝町西丁目10-6	古村春雄、文子	共同住宅建設	H10.3056	現GL~1.3m掘削、盛土内
76	08.11	左京一ノ坂七切四坪	西包永町43-4	和束和夫	集合住宅建設	H9.3321	現GL~0.3m掘削、盛土内
77	08.17	左京四条北坊十一坪	三条大町352-2	(株) 銀川文林堂 半折建設	半折建設	H10.3067	現GL~1.5m掘削、地山確認、造機・遺物なし
78	08.20	南紀寺遺跡	高畠町85-1	梅木茂	貴材屋塗造改	H10.3063	丁寧先行、地盤改良
79	08.25	左京五条六坊十六坪	西町1184	二木麻寿、善男	個人住宅建設	H10.3066	現GL~0.8m掘削、盛土内
80	08.25	左京七条西坊十二坪	東九条町1014-98	山下雅由	個人住宅新設	H10.3088	現GL~0.5m掘削、盛土内
81	08.26	東山坊大路	夷之町2-3	木谷力	個人住宅建設	H10.3097	現GL~0.3m掘削、盛土内
82	08.31	西坊訪問施	山崎町2-1	(株) 山崎建設	店舗改築	H10.3286	現GL~2.8m掘削、地山確認、土壁扒出ト、遺物なし
83	09.01	右京四条北坊五井町御所筋	六条二丁目1002-18	片桐修平	個人住宅建設	H10.3090	現GL~0.8m掘削、盛土内
84	09.02	右京五条七坊六井町御所筋	五条町二丁目601-9	中島狂男	個人住宅建設	H10.3110	丁寧先行
85	09.02	左京六条二坊十坪	六条町365-1他	(株) 黄色自動車生活	倉庫新設改築	H10.3007	現GL~0.85m掘削、盛土内
86	09.07	左京四条六坊十二坪	高畠町門33-1	増井昭彌	個人住宅新築	H10.3106	現GL~0.3m掘削、盛土内
87	09.10	右京一ノ坂六坪	二条町二丁目54-5	(株) マジックマックス	店舗改築	H10.3094	現GL~0.8m掘削、盛土内
88	09.10	一ノ坂大路	高畠町20-2、30-2	個人住宅建設	H10.3018	現GL~0.3m掘削、盛土内	
89	09.10	左京一ノ坂六坊十坪	法蓮町1086-1	岡田年郎	事務所改築	H10.3121	現GL~1.1m掘削、作土内
90	09.28	右京一ノ坂西坊九坪	若狭町西丁目869-2他	小松豊	宅地造成	H10.3055	盛土内
91	09.28	左京八条四坊十五坪	東九条町17-15	矢野昌二	個人住宅改築	H10.3108	現GL~0.3m掘削、盛土内
92	10.05	朱雀大路跡	前町90-45	丸山武久	個人住宅建設	H10.3112	丁寧先行
93	10.05	圓福寺御所境内	紫竹町30-2	(株) 佐藤和也建設	事務所新設	H10.3042	丁寧先行
94	10.05	右京一ノ坂一坪	佐紀町7-1	中島政治、昌代	個人住宅建設	H10.3123	現GL~0.8m掘削、盛土内
95	10.05	右京六条二坊四坪	六条一丁目37-8	堀田モトエ	個人住宅建設	H10.3107	現GL~0.8m掘削、盛土内
96	10.07	左京四条五坊十二坪	杉ヶ町27-3	天野タヨ子、荻原泰	個人住宅建設	H10.3078	現GL~0.75m掘削、地山確認、造機・遺物なし
97	10.08	左京四条六坊九坪	上二条町6-6他	河本和子	個人住宅建設	H10.3080	現GL~1.2m掘削、盛土内
98	10.08	新堀町方境内	高畠町351-3、351-8	西津治	個人住宅建設	H10.3153	現GL~0.4m掘削、盛土内
99	10.13	元興寺旧境内	西寺林町4	谷千鶴彦	個人住宅建設	H10.3158	丁寧先行
100	10.15	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目159-11	中村知雄	個人住宅建設	H10.3151	現GL~0.75m掘削、作土内
101	10.22	左京四条五坊十三坪	杉ヶ町6-6	上月常雄	個人住宅新築	H10.3133	現GL~0.9m掘削、旧河辺内
102	10.22	左京五条二坊十五坪	草小路町929	藤原雅弘	共同住宅建設	H10.3059	現GL~1.7m掘削、地山確認、造機・遺物なし
103	10.22	左京九条三坊七坪	西九条町二丁目4-2	福田利治	共同住宅建設	H10.3072	現GL~0.9m掘削、地山確認、造機・遺物なし
104	10.27	左京一ノ坂三坊四坪	法蓮寺町1239-1他	山口敏松	共同住宅建設	H10.3140	丁寧先行
105	10.28	柳ヶ丘遺跡敷布地	赤坂園町2848	奈良市水道事業管理者	井手水道見学者 用便水新築	H10.3133	現GL~0.3m掘削、地山確認、造機・遺物なし
106	10.29	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目145-1	藤勇	共同住宅建設	H10.3145	掘削工事なし
107	10.29	左京四条六坊十一坪	三条大町347-3	中井伸治	個人住宅建設	H10.3148	現GL~0.3m掘削、盛土内
108	10.30	左京五条六坊九坪	西町町40-11	安藤義季	個人住宅建設	H10.3137	現GL~0.4m掘削、地山確認、造機・遺物なし
109	11.05	成器天皇旗城跡判所跡	山崎町地内	奈良市長	公共下水道新設	H10.3161	現GL~2.0~3.0m掘削、地山確認、造機・遺物なし
110	11.05	左京九条一坊七坪	西九条町二丁目4-2	福田利治	共同住宅建設	H10.3078	現GL~0.85m掘削、地山確認、造機・遺物なし